第４章　遺構

検出した遺構においては遺物の出土が少ないため、帰属時期を明確にすることができないものが多数存在する。このため、帰属する時期を問わず遺構毎に一括して説明したい。

第１節　住居（図版第13、第６～８図）

６区を中心にSD２の南側で、弧状にめぐる溝を複数検出した。この弧状の溝が円形を呈する周溝であったと推定され、更に溝で区画された範囲の中央部付近に複数の柱穴が存在することから、住居と判断した。しかし、削平を受けているため全形および規模を正確に把握することができなかった。また、柱穴と周溝との位置関係から判断すると、複数の住居が重複して存在した可能性もある。検出された住居が竪穴式か平地式かについては明確にすることができなかったため、本節では両者を区別せずに一括して住居として扱いたい。なお、柱穴が明確に確認されず、溝だけが弧状にめぐる例も存在するが、この事例も住居に伴う周溝として扱った。

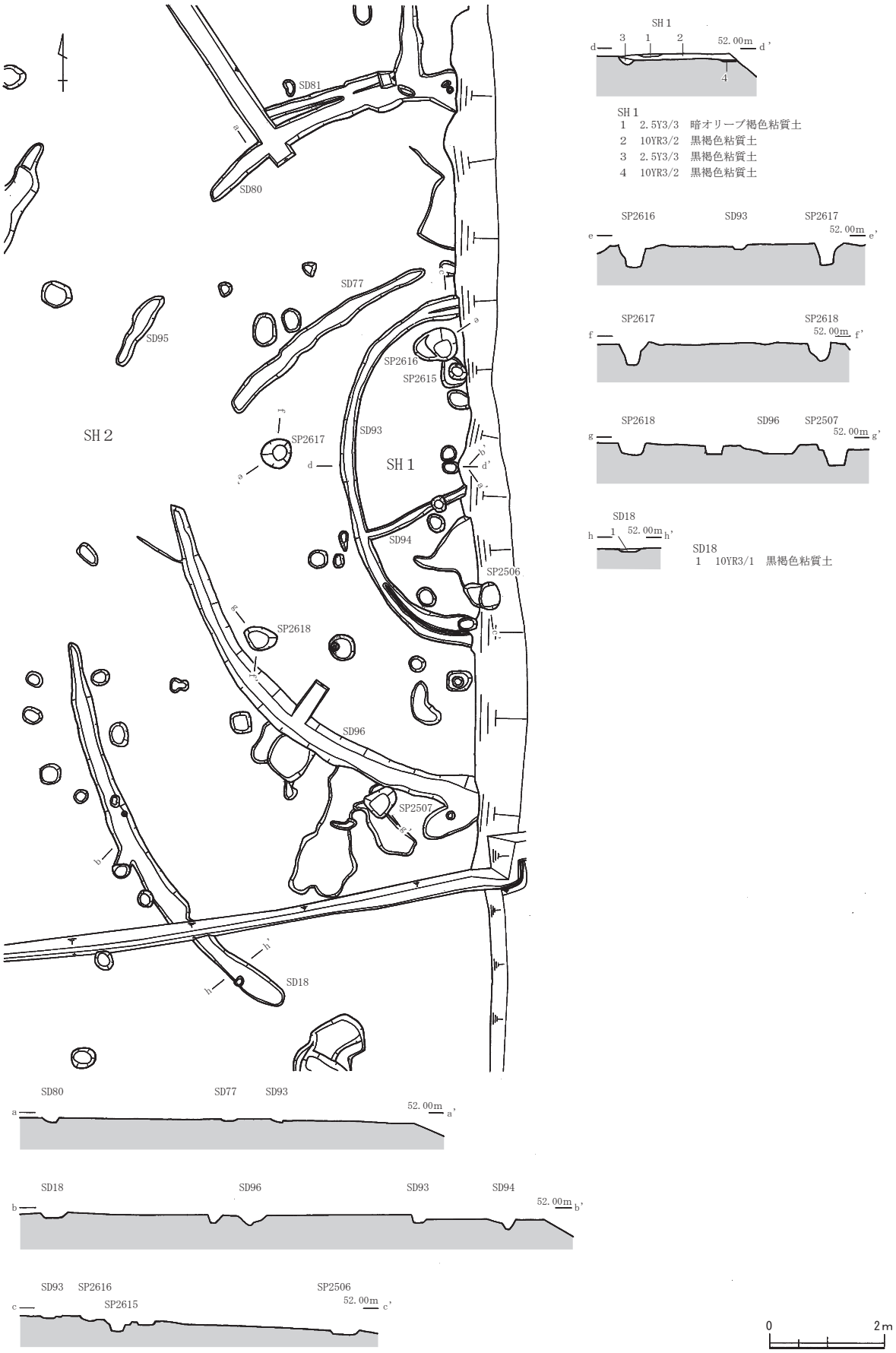
SH１・２（第６図）

２・６区のＢ22・Ｂ23・Ｃ22・Ｃ23・Ｄ22・Ｄ23において検出した。削平により、東半部は遺存しない。幅の狭い溝が三重にめぐり、その中央部に柱穴が設けられている。柱穴の配置状況から少なくとも２棟以上の住居が存在していたものと推定される。削平が著しいため、各住居の周溝と柱穴の対応関係および規模を推し量ることは困難である。それでも、最も内側のSD93とSP2506・SP2615が対応すると推定して、単純に反転すると４本柱の住居に復元し得る。この住居をSH１とする。周溝内が周囲よりも約0.01～0.07m低くなることから、SH１は竪穴式住居であった可能性があり、遺存部を基にすると南北軸が約6.00mをはかる隅丸方形の住居に復元できる。SD93は幅約0.20～0.30m、深さ約0.04～0.15mをはかる。SD93の南側では、住居内を区画する幅約0.15～0.16m、深さ約0.02～0.09mをはかるSD94が接続する。住居を構成する柱穴と推定されるSP2506・2615は、長軸約0.46～0.52m、短軸約0.36～0.46m、深さ約0.21～0.24mをはかる。復元案では、この両者がSH１の西側の柱穴列に相当し、柱穴列の長さは約3.95mをはかる。

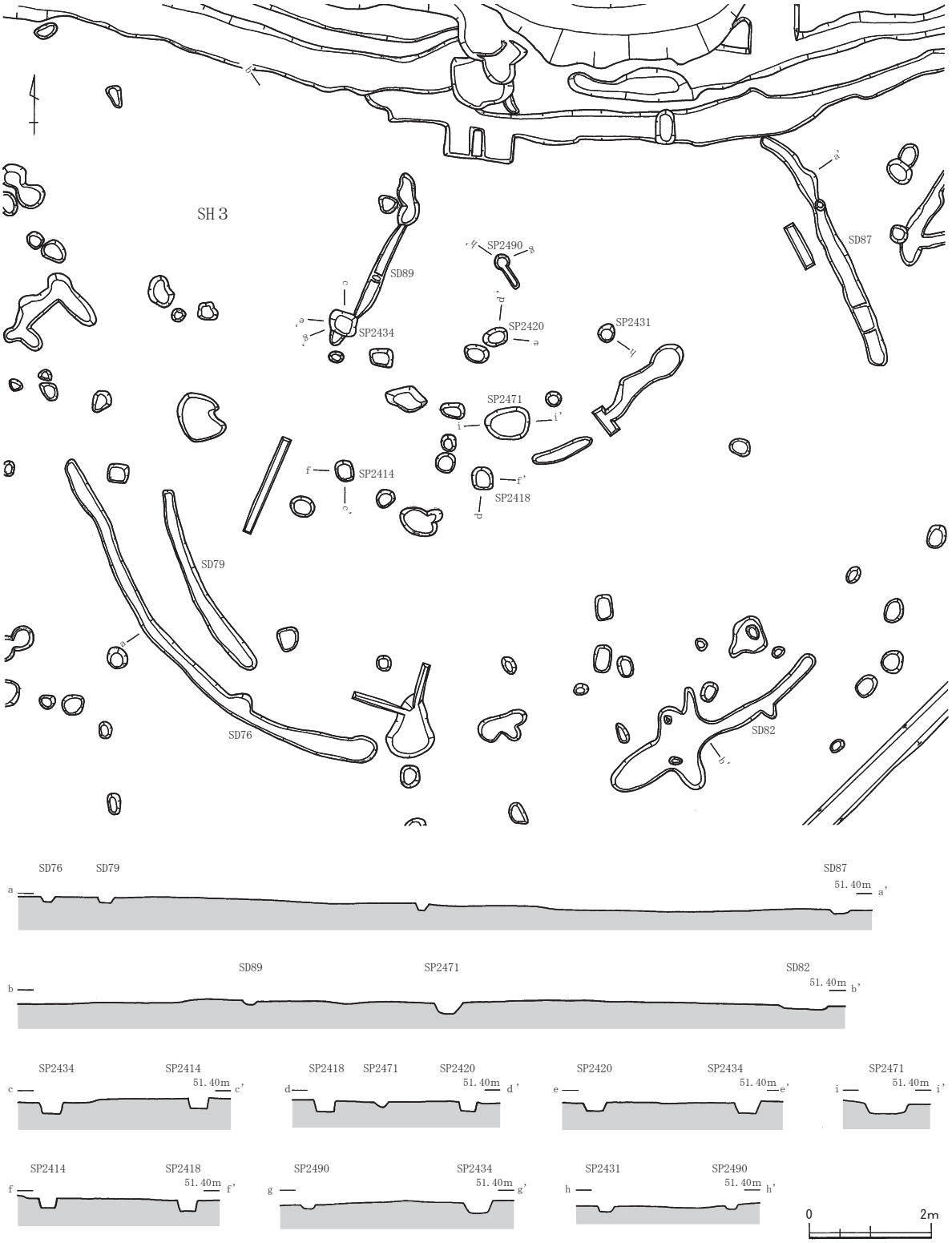
最も外側のSD18・80・81・95とSP2507・2616・2617・2618が対応すると推定して反転復元すると、不整ながらも周溝外縁部の直径が約18.40mをはかる円形を呈し、その内側に６本柱もしくはそれ以上の柱を持つ住居を復元することができる。この住居をSH２とする。なお、柱穴と周溝との間が広く空くため、平地式住居の可能性がある。ただし、柱穴は復元された円の中心ではなく、西側に偏って設けられていることになる。周溝は幅約0.16～0.48m、深さ約約0.02～0.10mをはかり、北側のSD80・81は重複する。住居を構成すると推定される柱穴は、長軸約0.53～0.74m、短軸約0.40～0.58m、深さ約0.21～0.39mをはかる。遺存する各辺の柱穴列の長さは、約3.22～3.52mをはかる。

なお、SH１・２の周溝としたもの以外にも弧状にめぐるSD77・96があり、更に別の住居が存在したか、あるいは住居の改築等が行われた可能性がある。いずれにしても検出した溝が断片的であるため、明確にし得ない状況にあるが、一応この両周溝もSH１・２に属するものとして扱いたい。

周溝を中心に、弥生土器の細片が僅かに出土している（第42図１～５）。SH１・２は、弥生時代に属する遺構と推定される。



第６図　遺構実測図１（縮尺 1/100）



第７図　遺構実測図２（縮尺 1/100）

SH３（第７図）

６区のＢ19～21・Ｃ19・Ｃ20において検出した。SD76・79・82・87が途切れながらも、ほぼ円形に配置され、一部では２重にめぐる。北側では周溝は検出できなかったが、遺存する周溝から復元すると不整ながらも周溝外縁部の直径が約13.30ｍをはかる円形を呈する。周溝で区画された中央部では、複数の柱穴を検出した。SH２と同様に、平地式住居の可能性がある。

周溝は幅約0.16～0.56ｍ、深さ約0.20～0.15ｍをはかる。SD82の西半部は切り合い関係がつかみきれなかったが、複数の遺構が重複して構築されたと考えられ、そのために幅広な溝状の形状になったと推定される。

検出した柱穴を基に復元すると、周溝で区画された範囲の中央に４本柱あるいはそれ以上の柱を持つ住居が存在したと推定される。検出した柱穴のみで復元すると、SP2414・2418・2420・2434の４本柱の住居となる。ただし、周溝で区画された範囲の西寄りに建物が存在したことになる。４本柱の住居を構成する柱穴列の長さは、北側柱穴列で約2.53ｍ、南側柱穴列で約2.27ｍ、東側柱穴列で約2.35ｍ、西側柱穴列で約2.46ｍをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な方形を呈する。東西の柱穴列を基に住居の方位を座標北から求めると、東側柱穴列では約Ｎ－６°－Ｅをはかり、西側柱穴列ではおおよそＮ－Ｓに揃う(1)。

一方、削平のため南東側の柱穴が失われたものと仮定し、SP2414・2431・2434・2490を基に反転復元すると６本柱もしくはそれ以上の柱を持つ建物を復元することができる。復元した建物は、周溝で区画された範囲のほぼ中央に位置する。遺存する各辺の柱穴列の長さは、約2.10～2.76ｍをはかる。

４本柱の住居であったか、それ以上の柱を持つ住居であったかは明確にはできないため、現時点では両方の復元案を提示するにとどめたい。なお、住居を構成する柱穴の規模は、長軸約0.24～0.45ｍ、短軸約0.23～0.37ｍ、深さ約0.07～0.20ｍをはかる。

周溝で区画された範囲のほぼ中央において、SP2471を検出した。平面形は長軸約0.70ｍ、短軸約0.52ｍをはかる不整な楕円形を呈し、深さは約0.21ｍをはかる。SH３のほぼ中央部に構築されているため、SH３に伴う遺構と考えられる。

周溝内からは、時期不詳の土師質土器の微細片、SP2471からは磨石が出土している（第42図６）。

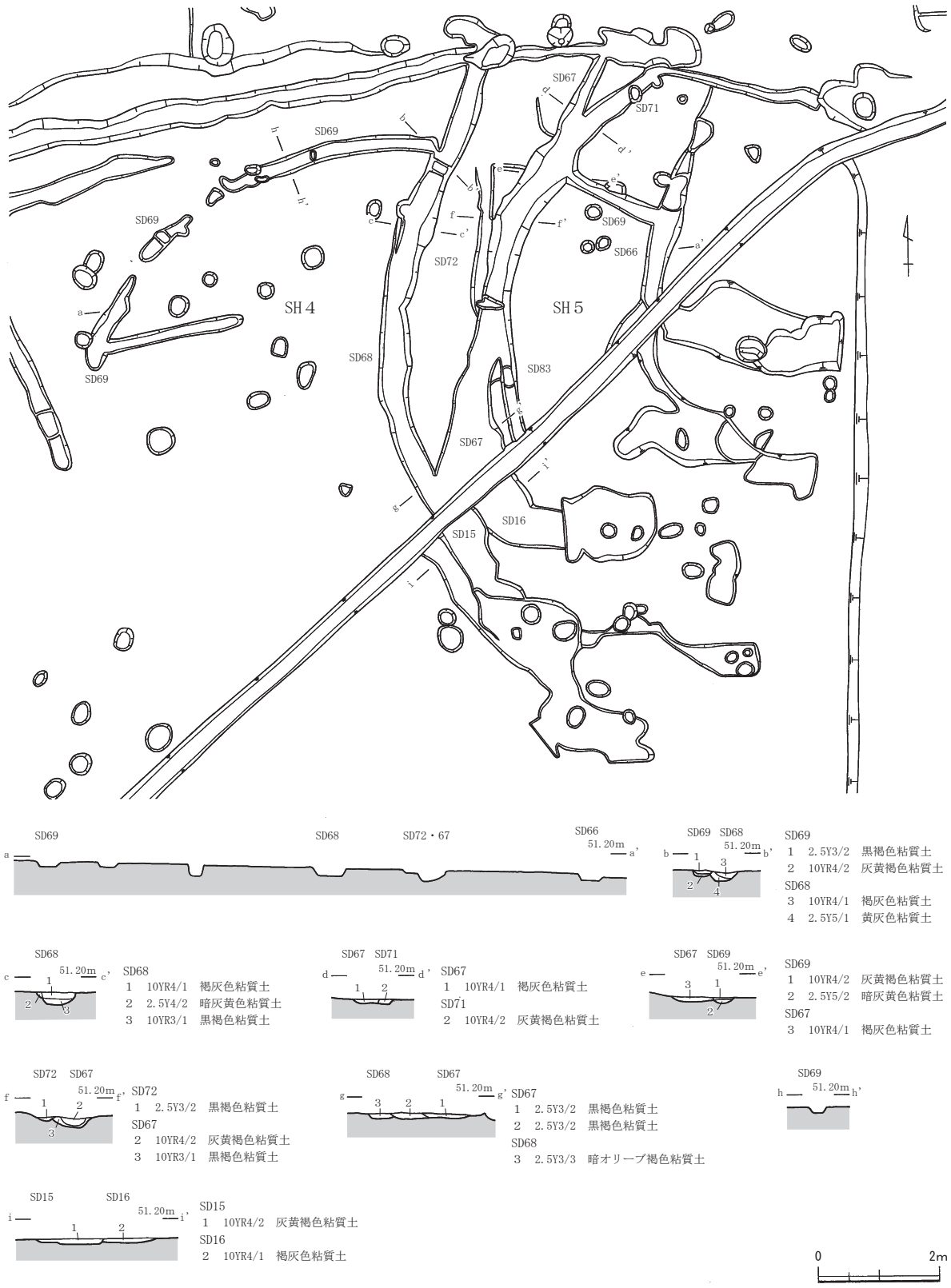
SH４（第８図）

６区のB19において検出した。SD69が弧状にめぐることから、周溝の一部と考えられる。住居を構成していたと推定される柱穴は、検出できなかった。仮にSD69が円形にめぐらされていたならば、不整ながらも周溝外縁部の直径が約12.20ｍに復元できる。なお、SD69はSH５のSD68に接する形で途切れており、SD66・67間にその一部を検出した。遺構の切り合い関係から、SD69が新しい周溝であり、この点からSH4がSH5よりも後出と考えられる。SD69は、幅約0.15～0.36ｍ、深さ0.06～0.09ｍをはかる。

周溝内からは、弥生土器の微細片が僅かに出土している（第42図７）。SH４は、弥生時代に属する遺構と推定される。

SH５（第８図）

２・６区のＢ18・Ｂ19・Ｃ18・C19において検出した。SH4に隣接して３条の溝が弧状にめぐることから、住居の周溝と考えられる。削平および攪乱が著しいため、住居を構成していたと推定される柱穴を検出することができなかった。また、同一箇所において複数の周溝が構築されているため、各周溝の先後関係を明確に捉えられなかった。特にSD67・71・72・83は同一箇所にて設けられており、遺構精査時には各周溝を明確に峻別できなかった。位置関係から類推するとSD71とSD83は同一の周溝と考えられ、本来は弧状にめぐっていた可能性がある。また、SD71・83と重複して直線的にのびるSD67・72が存在する。加えてSD67の南側ではSD68とも重なる。土層観察に基づくとSD68→SD67→SD72、SD71→SD67の順に構築されていた。仮にSD68が円形にめぐらされていたならば、不整ながらも周溝外縁部での直径が約14.00ｍに復元できる。また、SD71・83がSD67と重複して円形にめぐらされていたならば、不整な



第８図　遺構実測図３（縮尺 1/100）

がらも周溝外縁部の直径が約9.00mに復元できる。

周溝が重複して幅の広い箇所もあるが、周溝は幅約0.19～1.18m、深さ約0.05～0.21mをはかる。

なお、２区と５区にわたって検出したため、２区で検出したSD15・16とSH５の周溝との関係を明確に

することはできなかった。SH５の周溝が接続する可能性もあるが土層の切り合い関係や出土遺物から判断すると、SD15・16がSH５の周溝と重なる形で後世に設けられた遺構の可能性がある。

周溝内からは、弥生土器の微細片が僅かに出土している（第42図８～10）。SH５は、弥生時代に属する遺構と推定される。

第２節　掘立柱建物（図版第14～28、第９～30図）

一定の規格性をもって、不整ながらも方形もしくは長方形に配置される柱穴列を掘立柱建物と認定した。現時点では掘立柱建物の上屋構造が明確ではないため、便宜上柱間数に係わらず柱穴列で形成される平面形の長軸方向を桁行、短軸方向を梁行とした。なお、建物を構成する柱穴は全てが直線的に配置されていないため、柱穴列の横断面は全ての柱穴の形状が把握できるように設定して、実測・図化作業を行った。この実測・図化ラインを建物復元ラインとして扱い、このラインで構成される方形もしくは長方形を建物の平面形とした。なお、建物復元ラインが各柱穴の中心および遺存する柱根の上を通っていない例もある。このため、建物復元ラインから外れるものについては、柱根の位置等が把握できるように一部投影して図化を行った。建物の桁行長・梁行長は、建物復元ラインを基に測量図から計測したが、必ずしも柱穴の中心から計測したものではない。建物の桁行方位についても建物復元ラインを基に座標北より計測した。ただし、桁行の柱穴列が併行して配置されていない例もあるため、その場合は柱穴列ごとに計測して記載した。また、平面形が方形を呈して桁行・梁行の区別が判然としないものは、南北軸を桁行方向として扱い、東西の柱穴列から建物の方位を計測した。

なお、調査区全域で多数の柱穴を検出したが、現地調査段階では時間的制約のため、全ての柱穴の配置状況を検証して建物を復元することが十分に行えなかった。このため、現地調査終了後に測量図から再度遺構の配置状況を検討した結果、新たに建物として復元したものもある。このため、遺構番号については、新たに復元し得たものや２棟が１棟に統合されるものがある等したため再度振り直したが、基本的には現地調査時に使用したものを踏襲している。しかしながら、地区毎に遺構番号が連続せずに、飛んで振っていることを断っておきたい。加えて、当初小型の土坑として扱っていた遺構が、建物の復元過程において建物を構成する柱穴であることが判明し、改めて柱穴の番号を振り直している事例もある。建物を構成する柱穴についても深さが一定ではなく、同一の建物においても掘り込みの深い柱穴と浅い柱穴が混在する状況にある。その他にも調査区内では建物の復元に至らなかった多数の柱穴を検出しており、建物の棟数は更に多かったものと想定される。以上の点を踏まえると、建物の復元については未だ検討の余地を残していると言わざるを得ないが、現時点での復元案として提示しておきたい。また、建物を構成する各柱穴列の長さの平均値から、建物のおおよその床面積を算出した（第２・３表）。適宜、参照されたい。

SB１（第９図）

１区のＦ26・Ｇ26・Ｇ27において検出した、南北２間×東西２間の総柱建物である。北側柱穴列は約4.87m、南側柱穴列は約4.67m、東側柱穴列は約4.56m、西側柱穴列は約4.76mをはかる。各柱穴列の長さが近似しているため、桁行・梁行の区別が判然としない。東西の柱穴列を建物の桁行と仮定すると、東側柱穴列で約Ｎ－20°－Ｅ、西側柱穴列で約Ｎ－18°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.32～0.53m、短軸約0.26～0.48m、深さ約0.11～0.26mをはかる。

SB２（第10図）

１区のＦ27・Ｇ27において検出した、桁行４間×梁行２間の総柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約10.06ｍ、西側柱穴列で約10.11ｍ、梁行長は北側柱穴列で約4.83ｍ、南側柱穴列で約4.81ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－６°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.33～0.55ｍ、短軸約0.24～0.47ｍ、深さ約0.09～0.26ｍをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB３（第９図）

１区のＥ26・Ｆ26区において検出した、桁行２間×梁行１間の側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約3.03ｍ、南側柱穴列で約2.79ｍ、梁行長は東側柱穴列で約2.08ｍ、西側柱穴列で約2.06ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－90°－Ｅをはかる。北東隅のSP205が東側にずれて配置されているため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。なお、北側柱穴列では中間の間柱の柱穴が検出できなかった。削平により失われた可能性もある。建物を構成する柱穴は、長軸約0.30～0.46ｍ、短軸約0.20～0.27ｍ、深さ約0.04～0.14ｍをはかる。

SB４（第９図）

１・６区のＣ26において検出したが、１区の調査区東端に位置するためＬ字状を呈する南側柱穴列と西側柱穴列のみの検出となった。６区では北東隅の柱穴を検出できなかったが、一応建物と認定した。このため建物の全容は明らかではないが、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物であると考えられる。桁行長約2.75ｍ、梁行長約2.66ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－75°－Ｗをはかる。遺存する柱穴列から構成される平面形を復元すると、不整な長方形を呈すると推定される。建物を構成する柱穴は、長軸約0.26～0.57ｍ、短軸約0.24～0.25ｍ、深さ約0.06～0.14ｍをはかる。

SB５（第11図）

１区のＣ28・Ｃ29において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約2.78ｍ、西側柱穴列で約2.98ｍ、梁行長は北側柱穴列で約2.38ｍ、南側柱穴列で約2.53ｍをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－１°－Ｗ、西側柱穴列でＮ－２°－Ｗをはかる。南西隅のSP103が南側にずれて配置されているため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。なお、西側柱穴列では中間の間柱の柱穴が検出できなかった。削平により失われた可能性もある。建物を構成する柱穴は、長軸約0.30～0.41ｍ、短軸約0.27～0.34ｍ、深さ約0.11～0.26ｍをはかる。

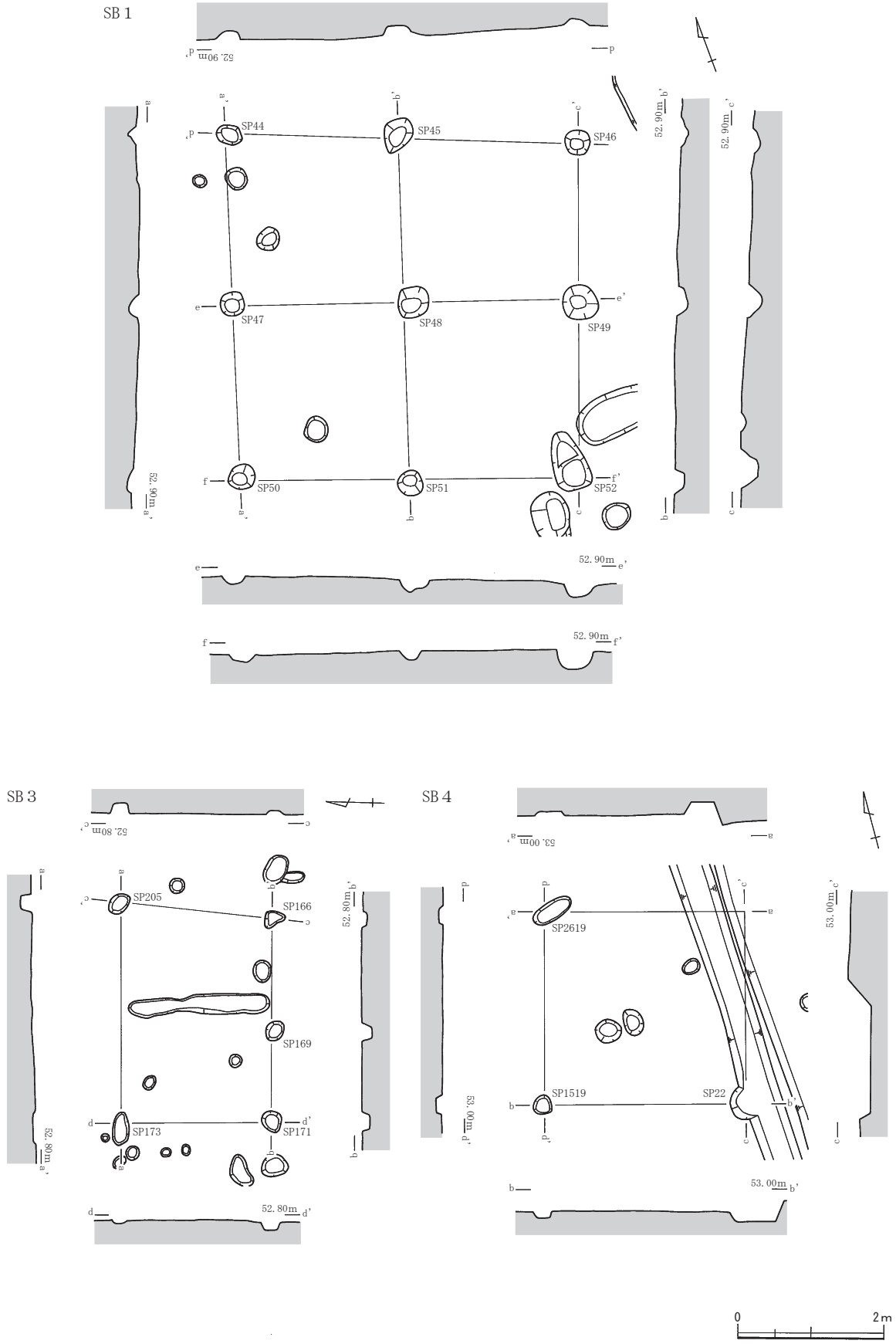
SB６（第12図）

２区のＤ23・Ｄ24・Ｅ23・Ｅ24において検出した、桁行２間×梁行２間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約3.93ｍ、西側柱穴列で約4.00ｍ、梁行長は北側柱穴列で約3.15ｍ、南側柱穴列で約3.02ｍをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－７°－Ｗ、西側柱穴列で約Ｎ－９°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.43～0.55ｍ、短軸約0.27～0.50ｍ、深さ約0.22～0.41ｍをはかる。

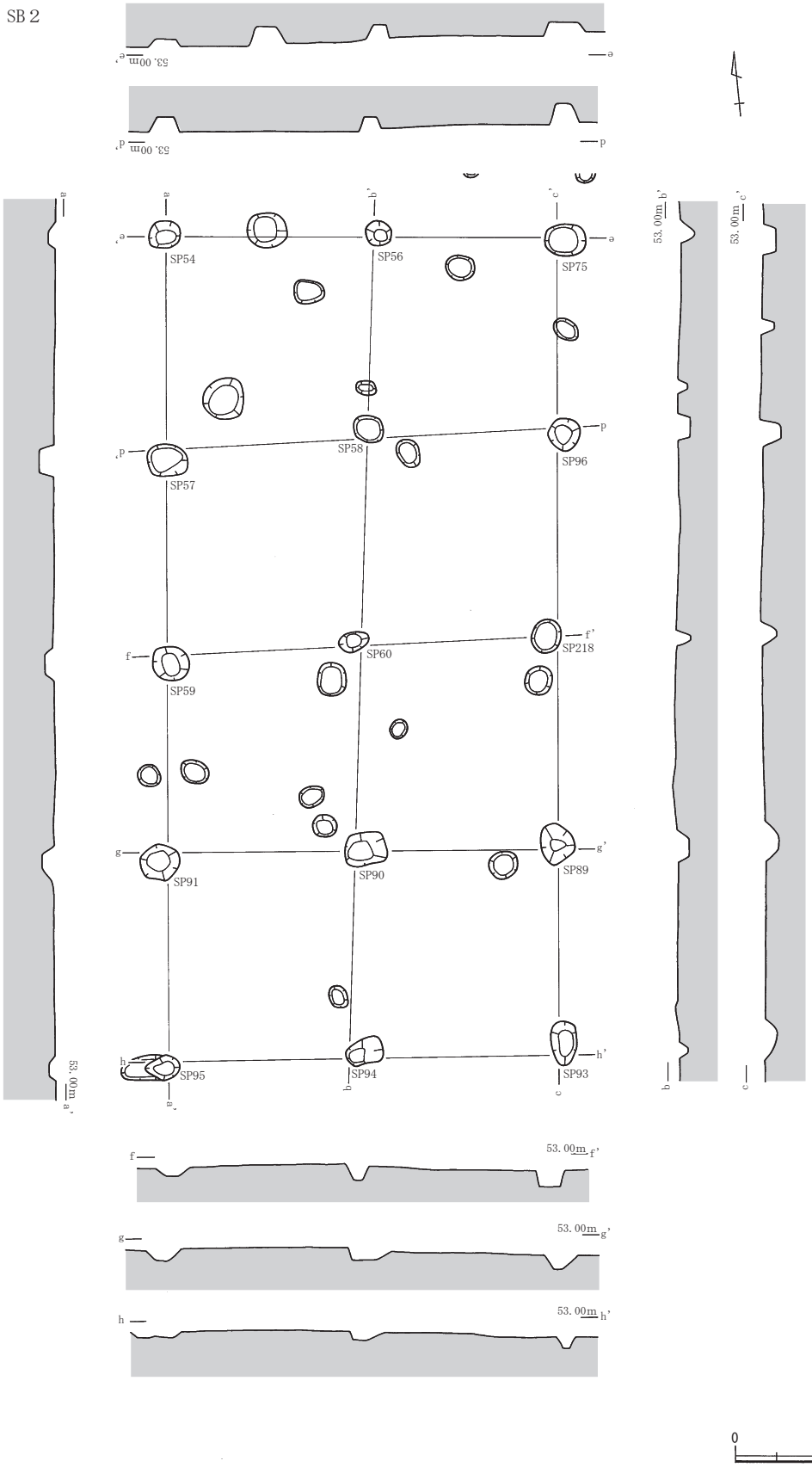
柱穴からは、弥生土器・古代の須恵器、および時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。古代以降に属する建物と推定される(2)。

SB７（第13図）

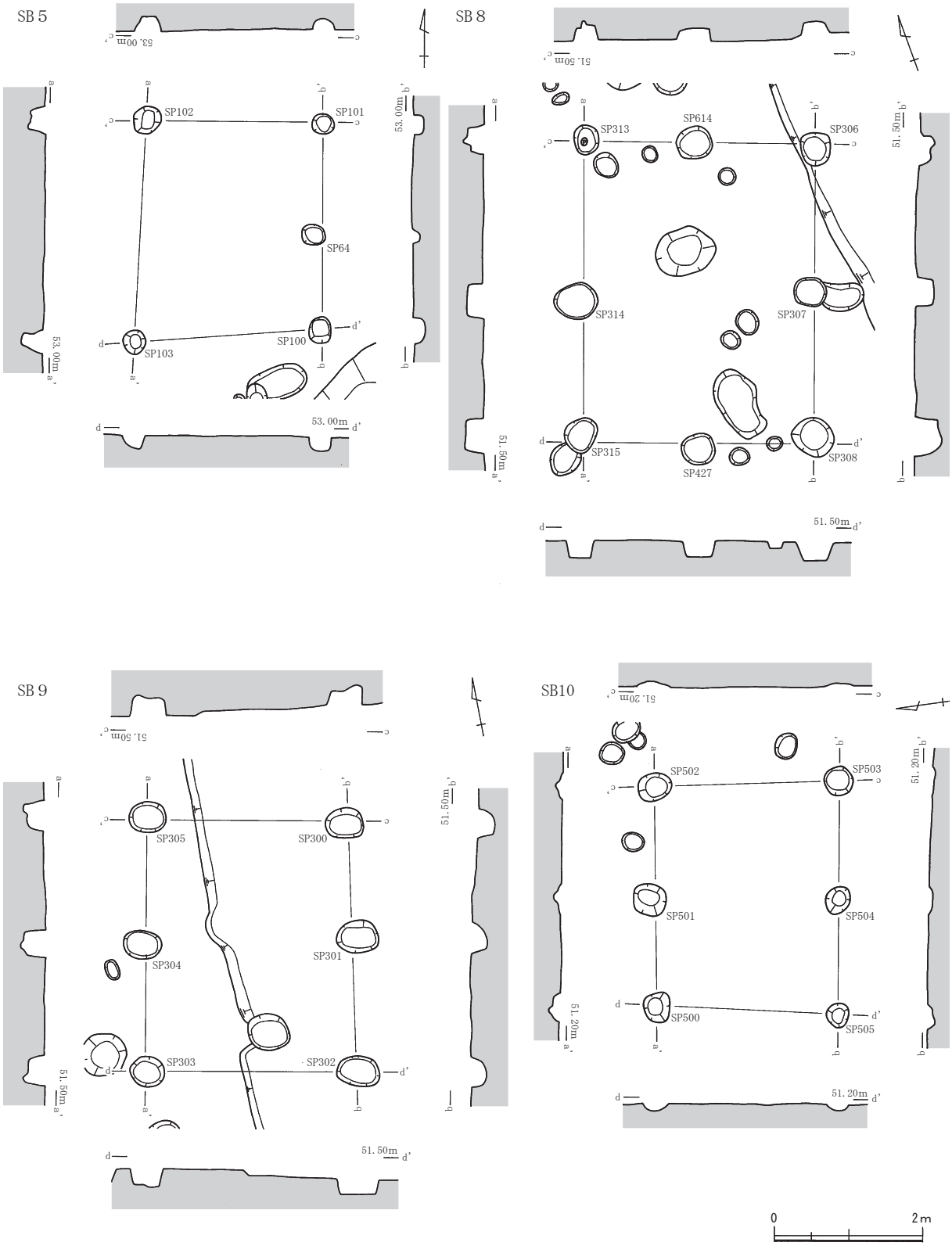
２・６区のＣ20・Ｃ21・Ｄ20・Ｄ21において検出した、桁行５間×梁行２間をはかる側柱建物である。



第９図　遺構実測図４（縮尺 1/80）



第10図　遺構実測図５（縮尺1/80）



第11図　遺構実測図６（縮尺1/80）

北側柱穴列が２区と６区の境に位置するため、調査開始時に掘削した排水溝によって破壊してしまった。このため、調査終了後に測量図を基にした柱穴の配置状況の再検討によって規模が確定した。桁行長は東側柱穴列で約12.70m、西側柱穴列で約12.67m、梁行長は北側柱穴列で約5.24m、南側柱穴列で約

5.14mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－３°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。なお、南側では建物内の梁行方向（ｄ－ｄ’）の中間にもSP578が設けられており、この柱穴列までを建物の身舎と仮定すると、南側に桁行１間分の下屋状の施設が付属していたとも想定できる。建物を構成する柱穴は、長軸約0.32～0.96ｍ、短軸約0.27～0.68ｍ、深さ約0.05～0.46ｍをはかるが、西側柱穴列のSP316・SP348のみ規模が小さい。また、SP318・319には柱根が遺存していた。

柱穴からは、弥生土器・古墳時代以降と推定される土師器・古代の須恵器、および時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している（第42図12）。古代以降に属する建物と推定される。

SB８（第11図）

２区のＤ20において検出した、桁行２間×梁行２間をはかる側柱建物である。桁行長約4.03ｍ、梁行長約3.12ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－20°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.40～0.60ｍ、短軸約0.34～0.50ｍ、深さ約0.16～0.38ｍをはかる。

柱穴からは、弥生土器および時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している（第42図13・14）。弥生時代以降に属する建物と推定される。

SB９（第11図）

２区のＣ20・Ｄ20において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は約3.49ｍ、梁行長は北側柱穴列で約2.71ｍ、南側柱穴列で約2.85ｍをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－11°－Ｅ、西側柱穴列で約Ｎ－13°－Ｅをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.46～0.57ｍ、短軸約0.37～0.44ｍ、深さ約0.21～0.30ｍをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB10（第11図）

２区のＤ19において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約2.95ｍ、南側柱穴列で約3.04ｍ、梁行長は東側柱穴列で約2.49ｍ、西側柱穴列で約2.45ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－83°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.33～0.45ｍ、短軸約0.30～0.43ｍ、深さ約0.04～0.16ｍをはかる。

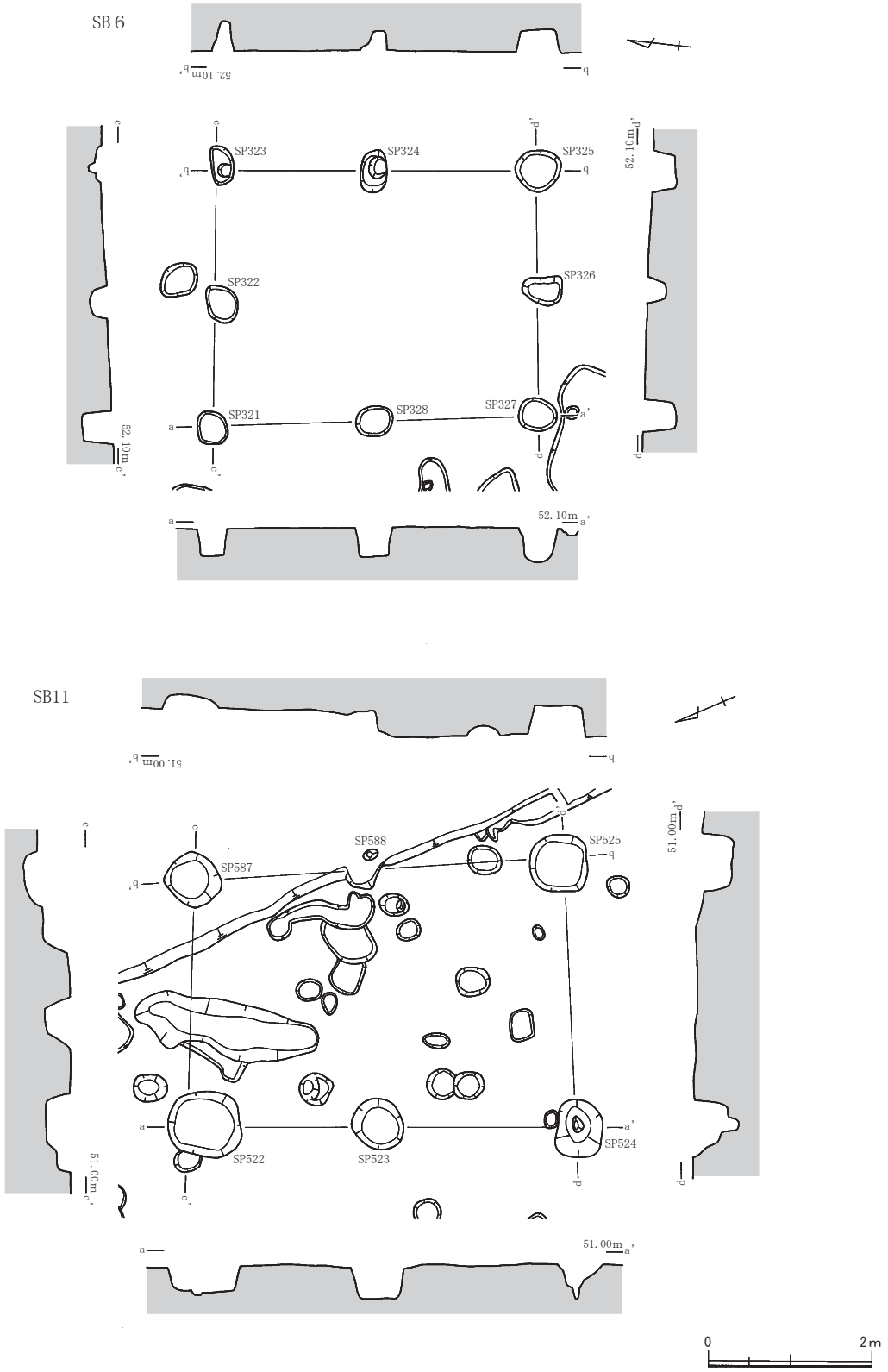
SB11（第12図）

２区のＤ18・Ｅ18において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約4.55ｍ、西側柱穴列で約4.77ｍ、梁行長は北側柱穴列で約3.03ｍ、南側柱穴列で約3.32ｍをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－20°－Ｅ、西側柱穴列でＮ－24°－Ｅをはかる。SB12と重なる。SP587・588は、削平により底部のみが遺存していた。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.65～0.92ｍ、短軸約0.54～0.80ｍ、深さ約0.22～0.56ｍをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

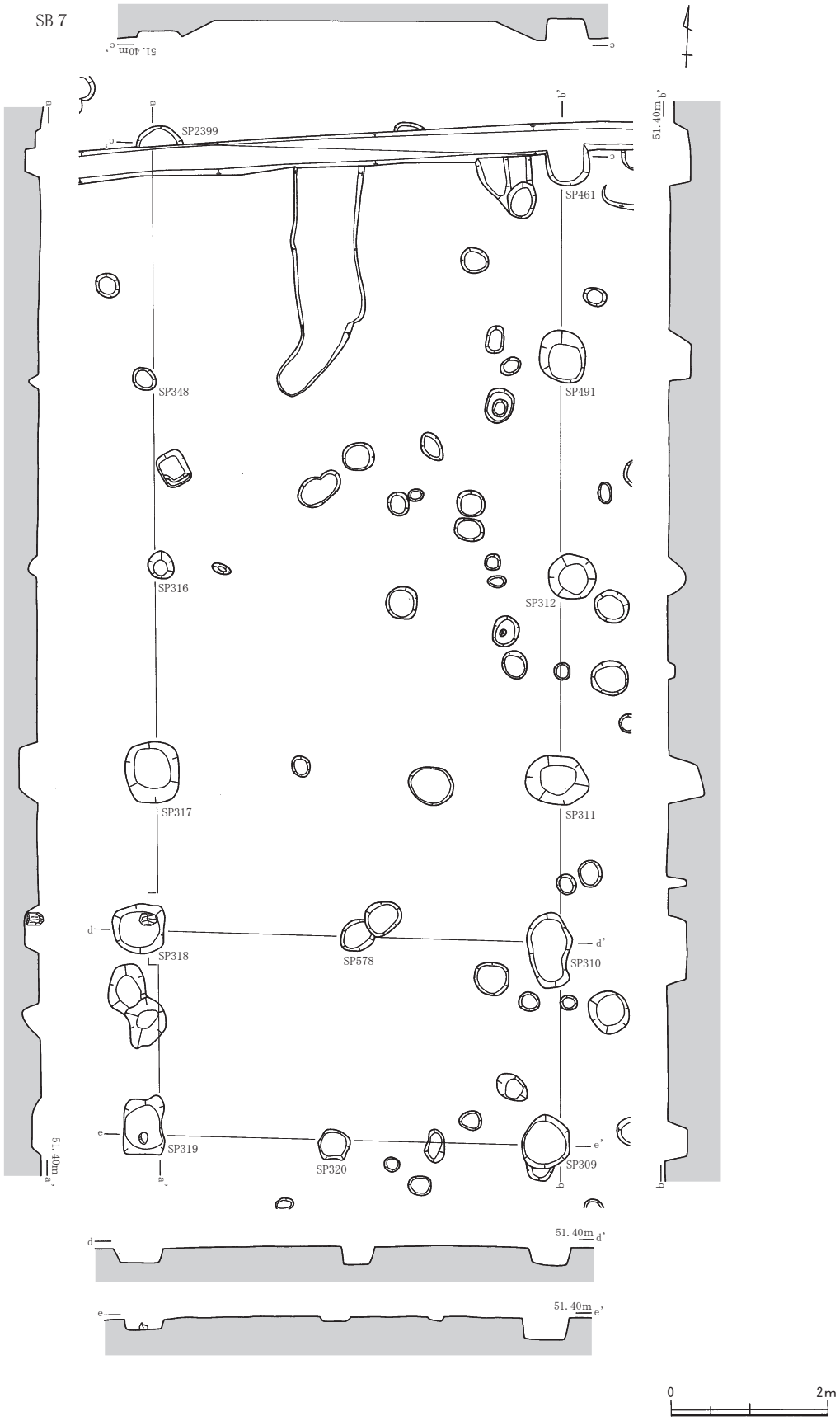
SB12（第14図）

２区のＤ18・Ｅ18において検出したが、削平のため北側柱穴列と西側柱穴列が失われており、Ｌ字状を呈する南側柱穴列と西側柱穴列のみの検出となった。このため建物の全容は明らかではないが、桁行

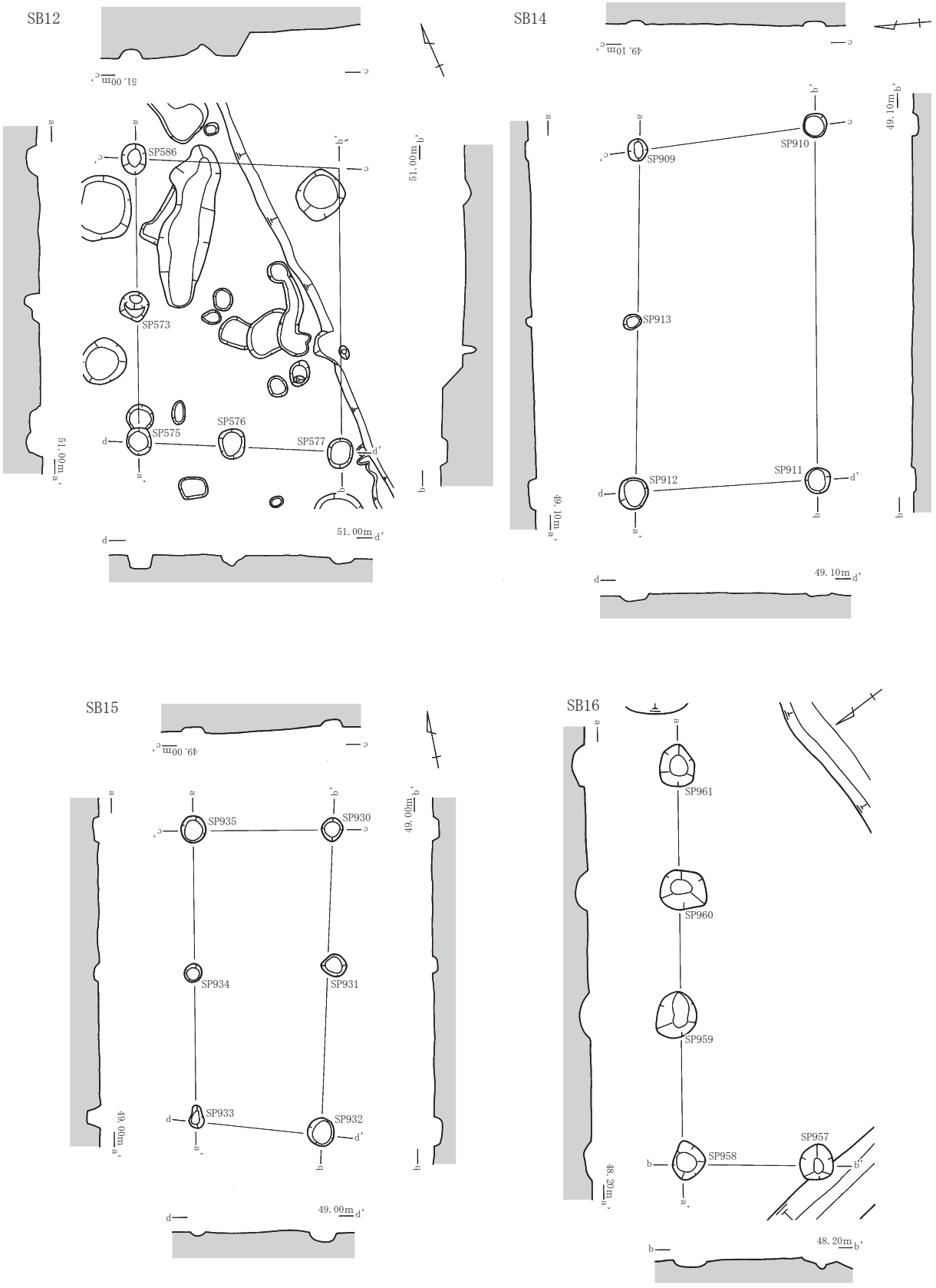


第12図　遺構実測図７（縮尺1/80）

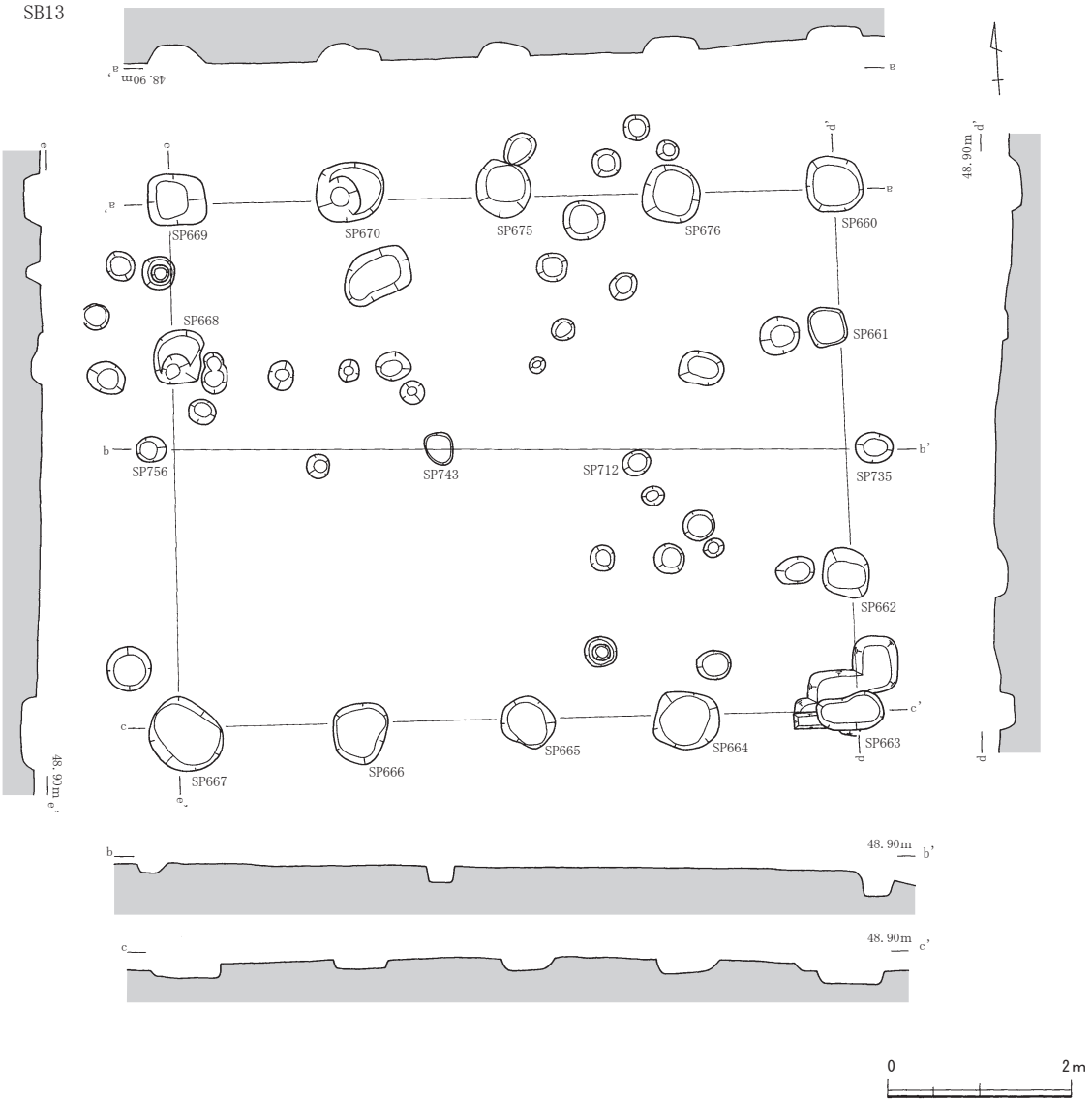
２間×梁行２間をはかる側柱建物であると推定される。桁行長約3.90m、梁行長約2.80mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－24°－Ｅをはかる。SB11と重なる。建物を構成する柱穴は、長軸約0.37～0.42m、短軸約0.33～0.41m、深さ約0.08～0.21mをはかる。



第13図　遺構実測図８（縮尺1/80）



第14図　遺構実測図９（縮尺1/80）



第15図　遺構実測図10（縮尺1/80）

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB13（第15図）

３区のＬ11・Ｌ12・M11・M12において検出した、桁行４間×梁行３間をはかる側柱建物である。なお、梁行にあたる東西の柱穴列のほぼ中央に隣接してSP735・756があり、近接棟持柱の柱穴と考えられる。また、西側柱穴列のSP667・668間では、間柱の柱穴が検出できなかった。桁行長は北側柱穴列で約7.28m、南側柱穴列で約7.43m、梁行長は約5.70mをはかる。棟持柱を結ぶ棟通り（ｂ－ｂ’）の長さは、約7.92mをはかる。桁行方位は、南北柱穴列はともに約Ｎ－88°－Ｗをはかるが、棟通りでは約Ｎ－87°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.31～0.83m、短軸約0.28～0.72m、深さ約0.05～0.26mをはかる。なお、建物内には棟通りに沿ってSP712・743が存在する。小規模ながら屋内に設けられた棟持柱の可能性がある。

柱穴からは、古墳時代以降と推定される土師器、および時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している（第42図11）。古墳時代以降に属する建物と推定される。

SB14（第14図）

３区のＯ12において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約4.70m、南側柱穴列で約4.87m、梁行長は東側柱穴列で約2.45m、西側柱穴列で約2.52mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－85°－Ｗをはかる。なお、南側柱穴列では中間の間柱の柱穴が検出できなかった。削平により失われた可能性もある。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.26～0.44m、短軸約0.20～0.40m、深さ約0.05～0.10mをはかる。

SB15（第14図）

３区のＱ12において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約4.22m、西側柱穴列で約4.02m、梁行長は北側柱穴列で約1.94m、南側柱穴列で約1.74mをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－13°－Ｅ、西側柱穴列でＮ－10°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.25～0.37m、短軸約0.24～0.37m、深さは約0.06～0.19mをはかる。

SB16（第14図）

４区のＪ８・Ｊ９において検出したが、４区の調査区西端に位置するためＬ字状を呈する北側中穴列と西側柱穴列のみの検出となった。このため建物の全容は明らかではないが、東西３間×南北１間以上をはかる側柱建物である。北側柱穴列の長さは約5.46m、西側柱穴列の長さは遺存値で約1.85mをはかる。隣接する７区では対応する柱穴が検出できなかったことから、北側柱穴列が桁行となる可能性が高く、その場合桁行方位は約Ｎ－54°－Ｗをはかる。建物を構成する柱穴は、長軸約0.49～0.64m、短軸約0.45～0.55m、深さ約0.10～0.18mをはかる。

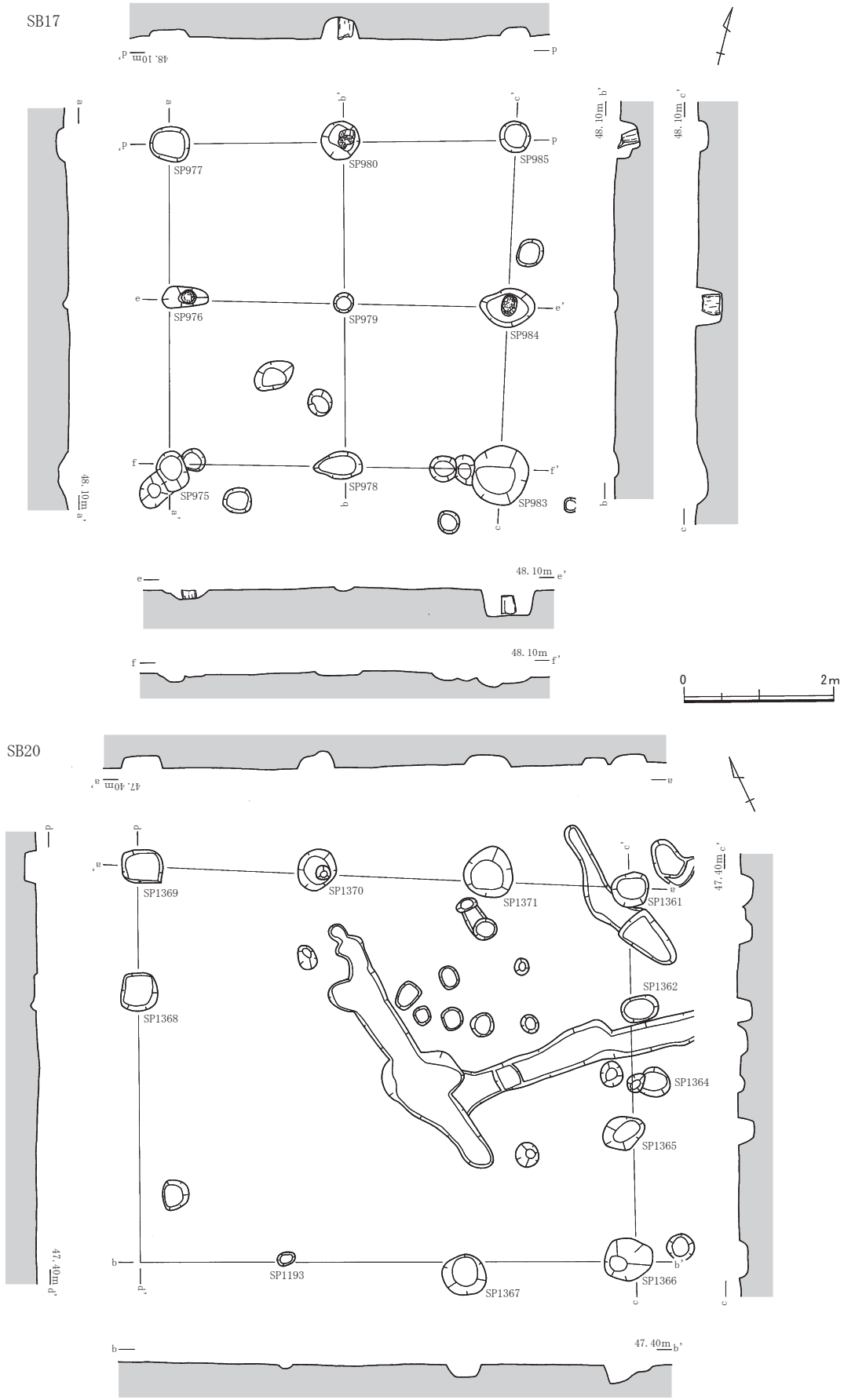
SB17（第16図）

４区のＧ９・Ｇ９・Ｈ８・Ｈ９において検出した、桁行２間×梁行２間の総柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約4.68m、南側柱穴列で約4.47m、梁行長は東側柱穴列で約4.43m、西側柱穴列で約4.29mをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－11°－Ｗ、西側柱穴列および中央柱穴列で約Ｎ－14°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。特にSP976が内側に入り込む。建物を構成する柱穴は、長軸約0.27～0.81m、短軸約0.26～0.79m、深さ約0.05～0.36mをはかる。なお、SP976・980・984には柱根が遺存していた。

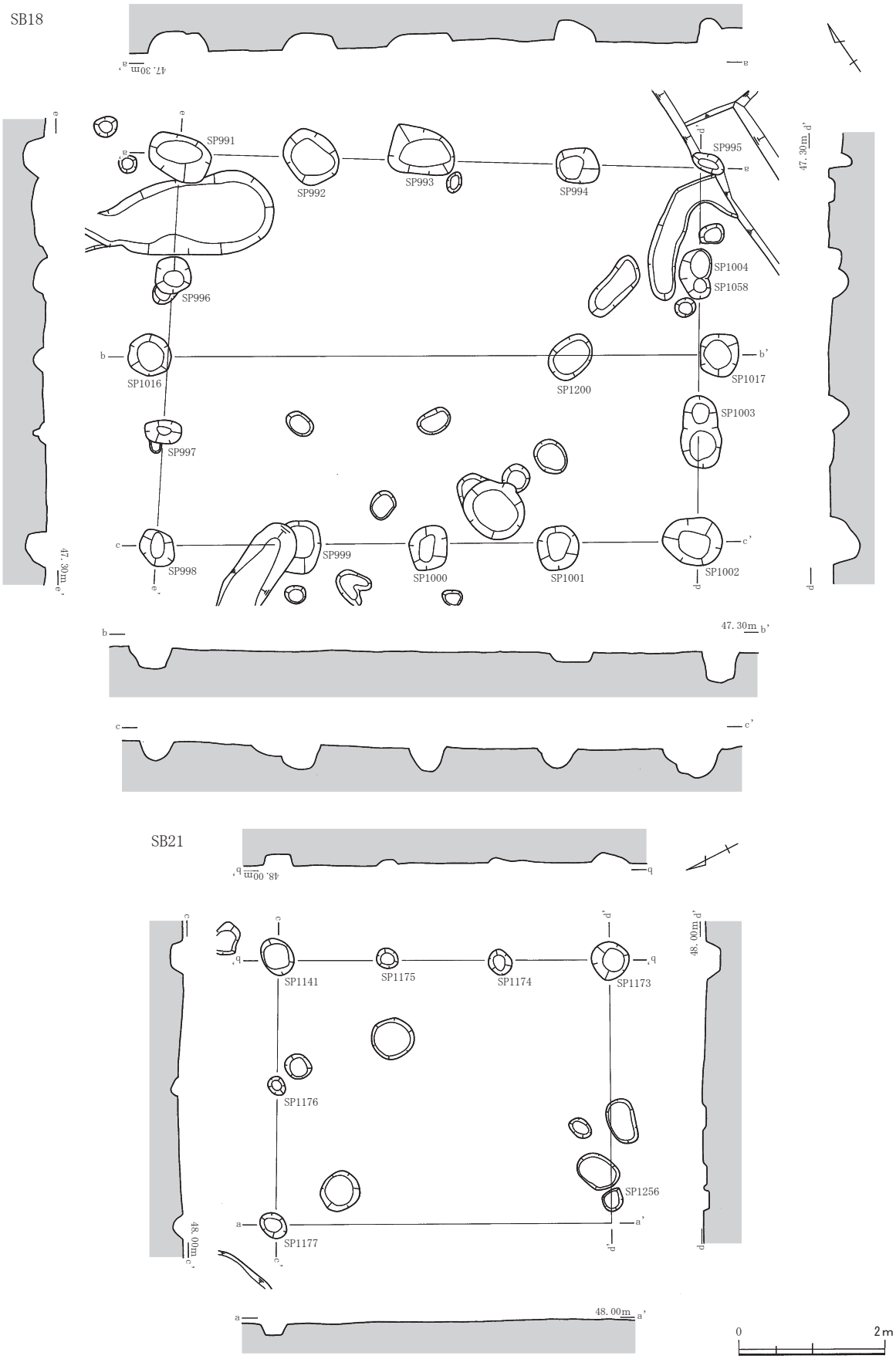
SB18（第17図）

４区のＪ３・Ｊ４・Ｋ３において検出した、桁行４間×梁行３間の側柱建物である。梁行にあたる東西柱穴列のほぼ中央に隣接してSP1016・1017があり、近接棟持柱の柱穴と考えられる。桁行長は北側柱穴列で約7.20m、南側柱穴列で約7.44m、梁行長は東側柱穴列で約5.22m、西側柱穴列で約5.39mをはかる。棟持柱を結ぶ棟通り（ｂ－ｂ’）の長さは、約7.80mをはかる。桁行方位は、北側柱穴列で約Ｎ－55°－Ｗ、南側柱穴列および棟通りで約Ｎ－57°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸0.40～0.86m、短軸約0.24～0.66m、深さ約0.16～0.42mをはかる。東側柱穴列のSP1004・1058の２基が近接して設けられていることから、建て替えが行われた可能性がある。切り合い関係から、SP1004が後出の柱穴である。なお、建物内には棟通りに沿ってSP1200が存在する。屋内に設けられた棟持柱の可能性も考えられる。

柱穴からは、時期不詳の須恵器、および土師質土器の微細片が僅かに出土している（第42図15）。少



第16図　遺構実測図11（縮尺1/80）



第17図　遺構実測図12（縮尺1/80）

なくとも、古墳時代以降に属する建物と推定される。

SB19（第18図）

４区のＨ６・Ｈ７・Ｉ７において検出した、桁行２間×梁行３間の側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約5.65m、西側柱穴列で約5.78m、梁行長は北側柱穴列で約5.60m、南側柱穴列で約5.62mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－37°－Wはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.46～1.02m、短軸0.43～0.66mをはかる。SP1022・1109・1110・1111・1113・1114では、柱根あるいは柱根の一部と推定される木片が遺存していた。特にSP1109・1110・1113・1114では底面が一段深く掘り込まれ、柱根が据えられていた。ただし、SP1109・1113では掘方が明確に捉えられなかった。建物の荷重により柱根が沈み込み、かつ柱根の周囲が腐蝕した結果、柱根の周囲に掘り込み状の落ち込みが形成された可能性もあり得る。なお、SP1109の柱根の下からは、礎板と推定される板材も検出された。柱穴の深さは約0.22～0.47mをはかるが、柱根下までの深さは約0.58～0.62mをはかる。

柱穴からは、弥生土器・古墳時代の須恵器、および時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している（第42図17～19）。古墳時代以降に属する建物と推定される。

SB20（第16図）

４区のＩ４・Ｉ５・Ｊ４・Ｊ５において検出した、桁行３間×梁行３間の側柱建物である。梁行の東側柱穴列に中央に隣接してSP1364が存在するが、この柱穴に対応する柱穴が西側柱穴列では検出できなかったものの、やはり近接棟持柱になる可能性がある。桁行長は約6.62m、梁行長は約5.02mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－63°－Wをはかる。削平のため、西側柱穴列の南半２基の柱穴が失われていた。また、南側柱穴列のSP1193も底部のみを検出した。柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈していたものと推定される。建物を構成する、柱穴は、長軸約0.24～0.68m、短軸約0.17～0.67m、深さ約0.05～0.25mをはかる。

SB21（第17図）

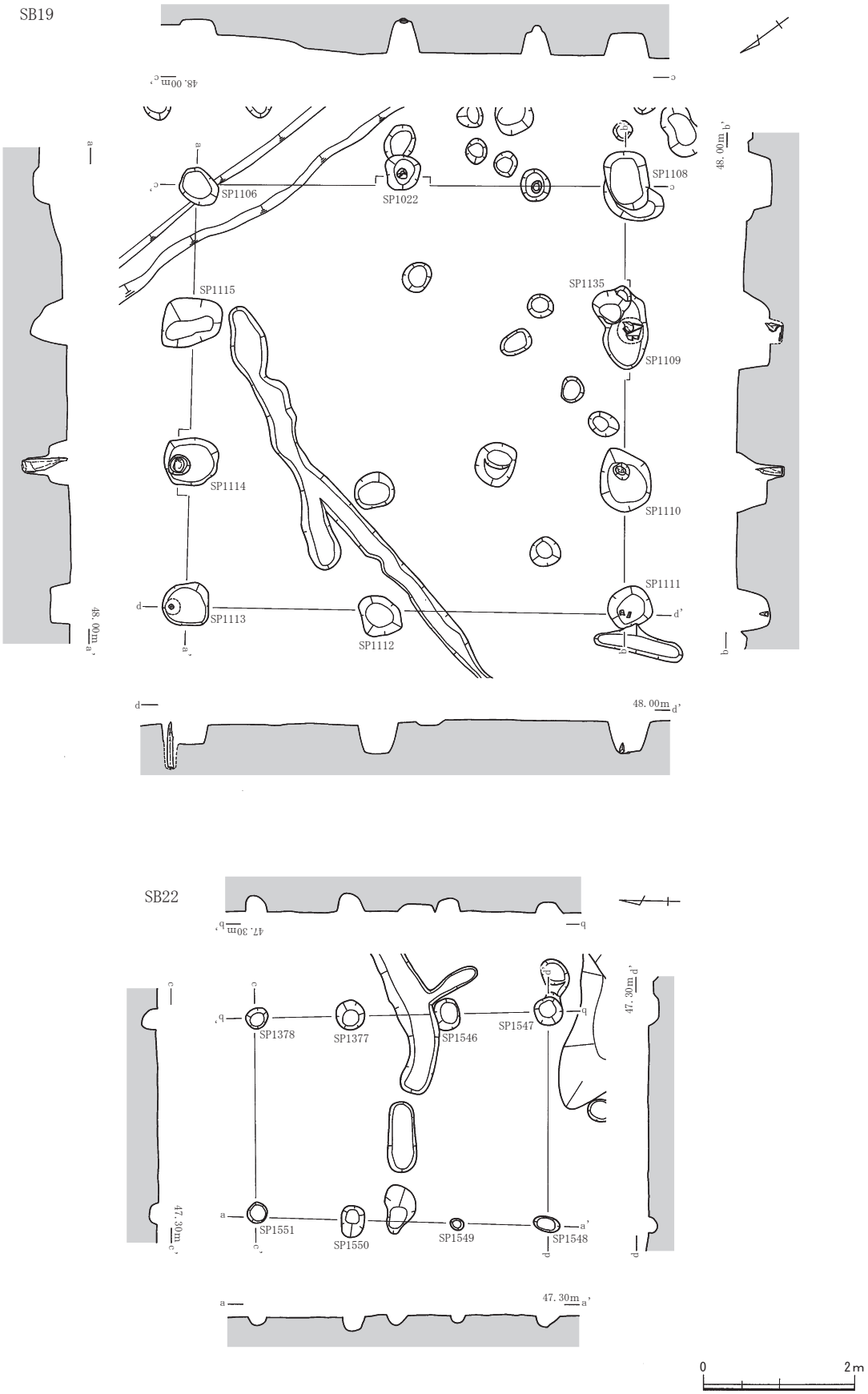
４区のＩ７・Ｉ８において検出したが、削平のため南側柱穴列と西側柱穴列が失われており、Ｌ字状を呈する北側柱穴列と東側柱穴列のみの検出となった。このため建物の全容は明らかではないが、桁行３間×梁行２間をはかる側柱建物と推定される。桁行長は約4.53m、梁行長は約3.62mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－28°－Ｅをはかる。なお、建物の復元ラインから東へ少し外れるが、南西隅にSP1256が存在しており、これが南西隅の柱穴となる可能性もある。建物を構成する柱穴は、長軸約0.27～0.52m、短軸約0.23～0.51m、深さ約0.06～0.16mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の須恵器および土師質土器の微細片が僅かに出土している。少なくとも、古墳時代以降に属する建物と推定される。

SB22（第18図）

４区のＨ４・Ｈ５・Ｉ４・Ｉ５において検出した、桁行３間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約3.88m、南側柱穴列で約3.86m、梁行長は北側柱穴列で約2.64m、南側柱穴列で約2.84mをはかる。桁行方位は、東側柱穴列では約Ｎ－25°－W、西側柱穴列では約Ｎ－１°－Ｅをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.18～0.43m、短軸約0.15～0.37m、深さ約0.12～0.23mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。



第18図　遺構実測図13（縮尺1/80）

SB23（第19図）

５区のＦ15・Ｆ16・Ｇ15・Ｇ16において検出した、桁行４間×梁行３間の側柱建物である。桁行長約8.27m、梁行長約6.00mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－80°－Ｗをはかる。西側には攪乱の土坑が存在しており、このために南側柱穴列の一部と西側柱穴列が失われている。柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈していたものと推定される。建物を構成する柱穴は、長軸約0.59～1.16m、短軸約0.45～0.79m、深さ約0.16～0.39mをはかる。

柱穴からは、弥生土器および時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している（第42図16）。弥生時代以降に属する建物と推定される。

SB24（第19図）

５区のＤ16において検出した、南北２間×東西２間の側柱建物である。北側柱穴列は約3.67m、南側柱穴列は約3.48m、東側柱穴列は約3.64m、西側柱穴列は約3.80mをはかる、各柱穴列の長さが近似しているため、桁行・梁行の区別が判然としない。東西の柱穴列を建物の桁行と仮定すると、東側柱穴列で約Ｎ－29°－Ｅ、西側柱穴列で約Ｎ－26°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.57～0.74m、短軸約0.46～0.56m、深さ約0.13～0.44mをはかる。

柱穴からは、弥生土器および時期不詳の土師質土器の微細片が出土している。弥生時代以降に属する建物と推定される。

SB25（第20図）

５区のＥ15において検出した、桁行２間×梁行１間の側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約4.00m、西側柱穴列で約3.80m、梁行長は北側柱穴列で約2.40m、南側柱穴列で約2.60mをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－19°－Ｅ、西側柱穴列で約Ｎ－21°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.34～0.61m、短軸約0.32～0.37m、深さ約0.23～0.43mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB26（第20図）

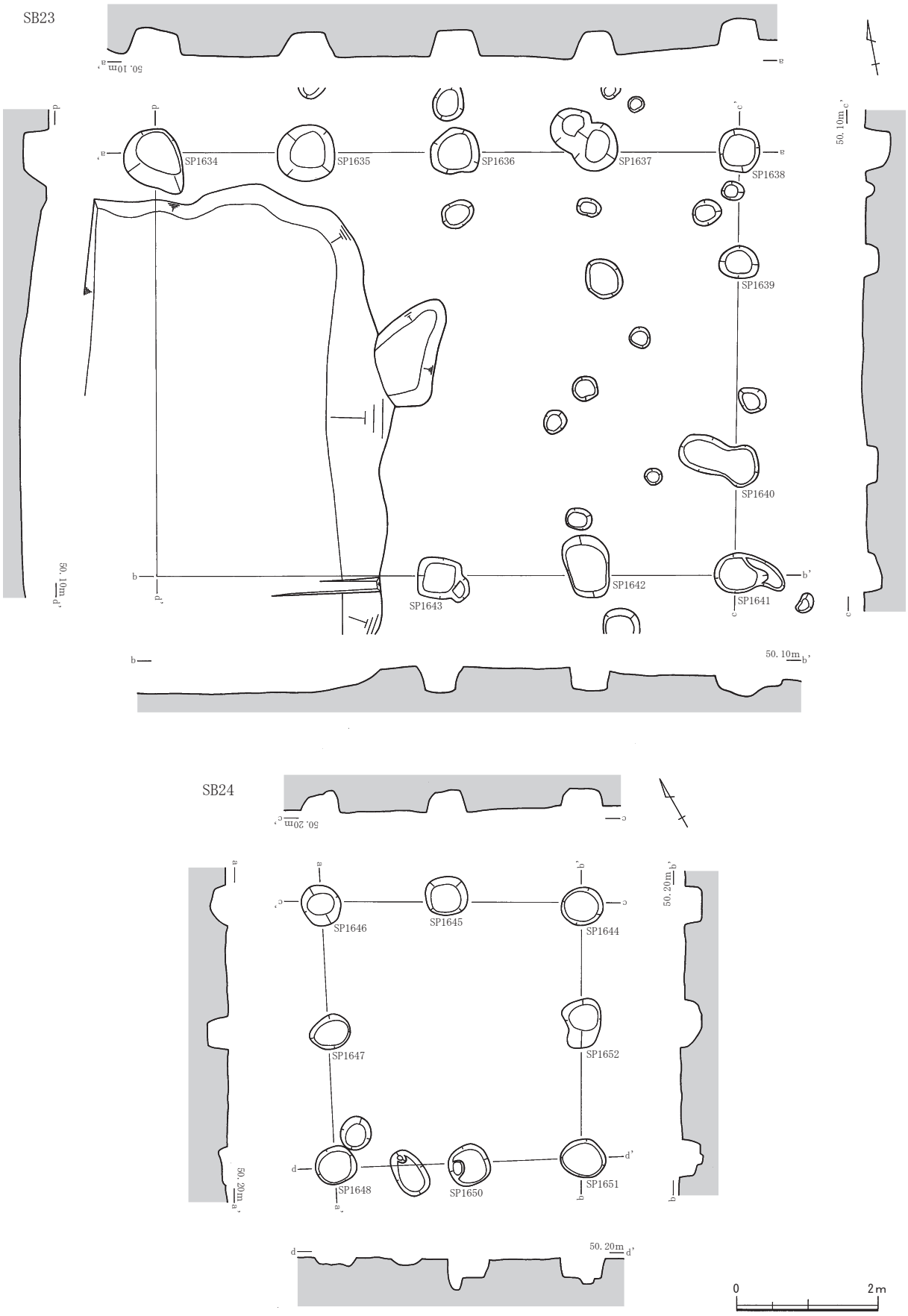
５区のＤ16・Ｅ16において検出した、桁行１間×梁行１間の側柱建物である。桁行長は約3.35m、梁行長は北側柱穴列で約2.90m、南側柱穴列で約2.71mをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－９°－Ｅ、西側柱穴列で約Ｎ－６°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.38～0.72m、短軸約0.37～0.54m、深さ約0.14～0.29mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

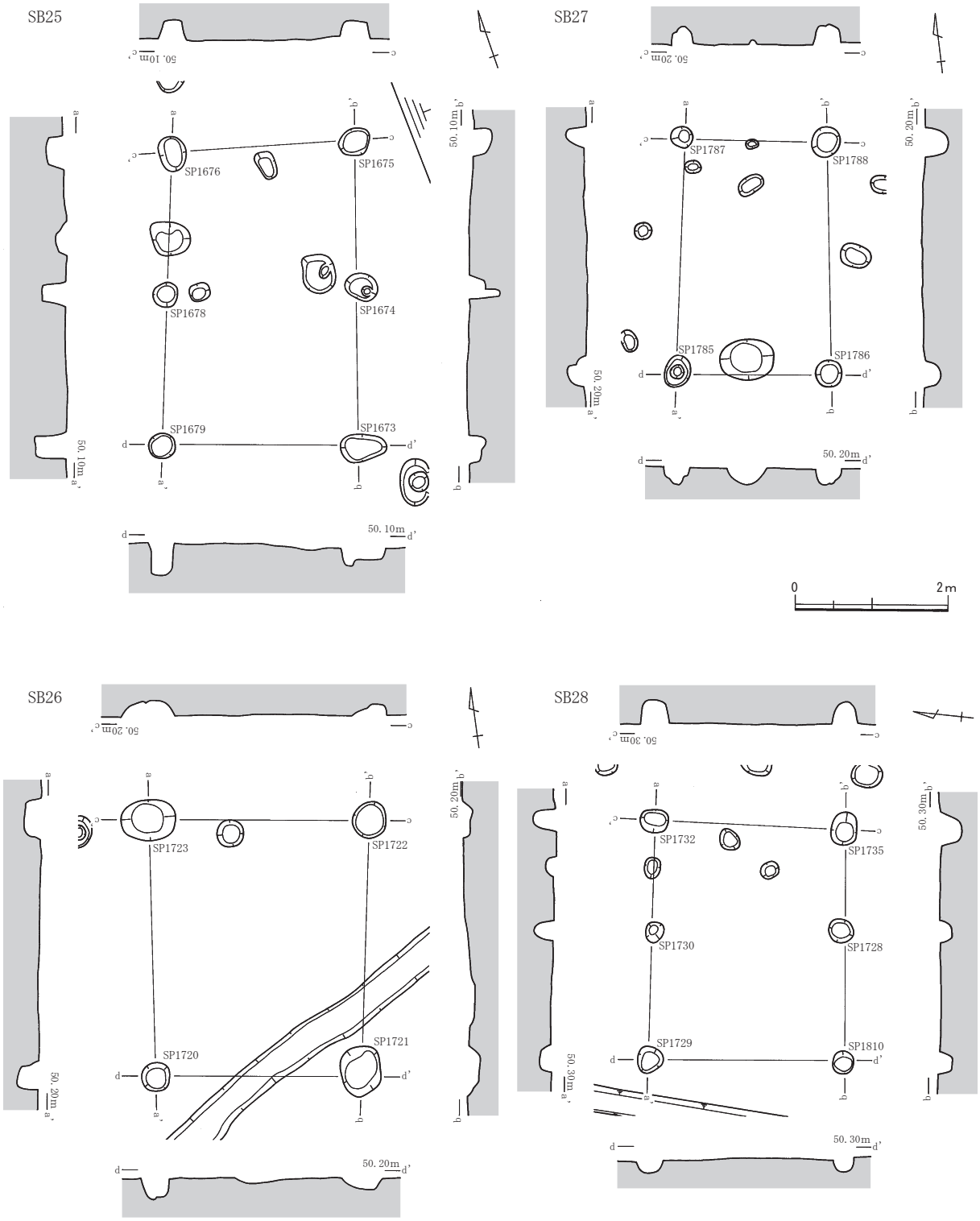
SB27（第20図）

５区のＤ16において検出した、桁行１間×梁行１間の側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約3.05m、西側柱穴列で約3.09m、梁行長は北側柱穴列で約1.87m、南側柱穴列で約2.04mをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－６°－Ｅ、西側柱穴列で約Ｎ－９°－Ｅをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.27～0.42m、短軸約0.29～0.37m、深さ約0.23～0.30mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。



第19図　遺構実測図14（縮尺1/80）



第20図　遺構実測図15（縮尺1/80）

SB28（第20図）

５区のＤ16・Ｄ17において検出した、桁行２間×梁行１間の側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約3.04m、南側柱穴列で約3.02m、梁行長は約2.50mをはかる。桁行方位は、北側柱穴列で約Ｎ－85°－Ｅ、南側柱穴列で約Ｎ－83°－Ｅをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。

建物を構成する柱穴は、長軸約0.30～0.44m、短軸約0.24～0.35m、深さ約0.15～0.31mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB29（第21図）

５区のＦ14において検出したが、削平のため南側柱穴列と西側柱穴列が失われており、Ｌ字状を呈する北側柱穴列と東側柱穴列のみの検出となった。念のため、西側柱穴列に相当する箇所にトレンチを設定して柱穴の掘方の有無を確認したが、やはり掘方は検出できなかった。このため、建物の全容は明らかではないが、桁行２間×梁行２間をはかる側柱建物であると推定される。また、SP1839の西半部は攪乱を受けており、ここでもトレンチを設定して掘方の有無を確認したが、掘方は検出できなかった。桁行長は東側柱穴列で約4.86m、梁行長は北側柱穴列で約3.47mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－31°－Ｅをはかる。建物を構成する柱穴は、長軸約0.63～0.95m、短軸約0.25～0.84m、深さ約0.06～0.32mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB30（第21図）

５区のＦ12・Ｆ13・Ｇ12において検出した、桁行３間×梁行１間の側柱建物である。削平のため、北西隅の柱穴が失われていた。桁行長は南側柱穴列で約7.08m、梁行長は東側柱穴列で約5.04mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－70°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈していたと推定される。建物を構成する柱穴は、長軸約0.46～0.61m、短軸約0.23～0.55m、深さ約0.10～0.25mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB31（第22図）

５区のＨ11・Ｈ12・Ｉ11・Ｉ12において検出した、桁行３間×梁行２間をはかる総柱建物である。桁行長約4.40m、梁行長約4.18mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－35°－Ｅをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.45～0.83m、短軸約0.31～0.73m、深さ約0.24～0.36mをはかる。なお、北西隅のSP2225は攪乱の影響で遺構精査時には明確に検出することが叶わず、トレンチによる掘り下げによって掘方を確認したため、底部のみの検出となった。

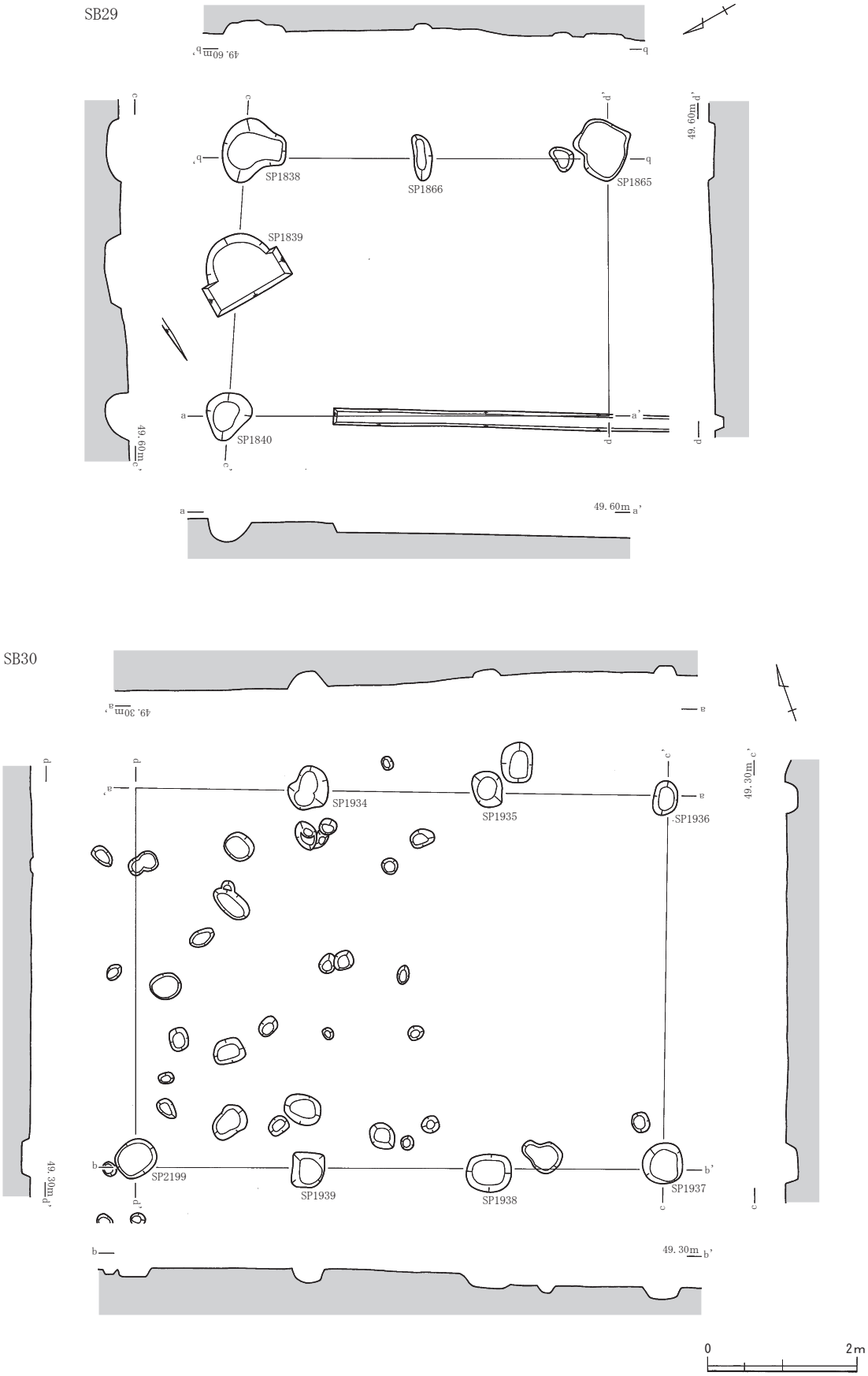
柱穴からは、古墳時代の須恵器および時期不詳の土師質土器の微細片が出土している。古墳時代以降の属する建物と推定される。

SB32（第22図）

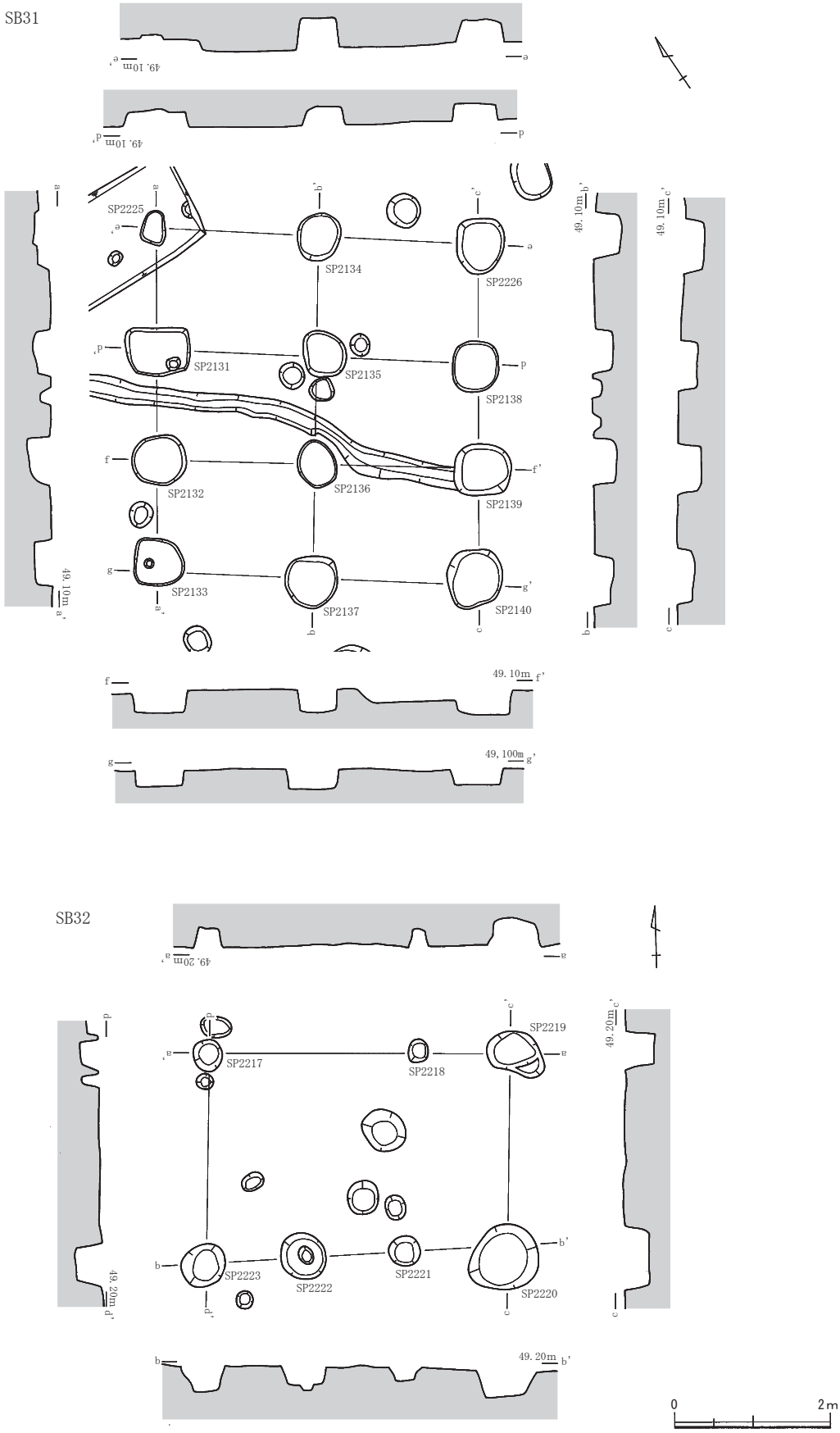
５区のＩ11・Ｉ12において検出した、桁行３間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約3.90m、梁行長は東側柱穴列で約2.50m、西側柱穴列で約2.73mをはかる。桁行方位は、北側柱穴列は東西方向に、南側柱穴列は約Ｎ－87°－Ｅをはかる。なお、北側柱穴列ではSP2217・2218間の間柱の柱穴が検出できなかった。削平により失われた可能性もある。各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.31～0.94m、短軸約0.25～0.84m、深さ約0.18～0.34mをはかる。

SB33（第23図）

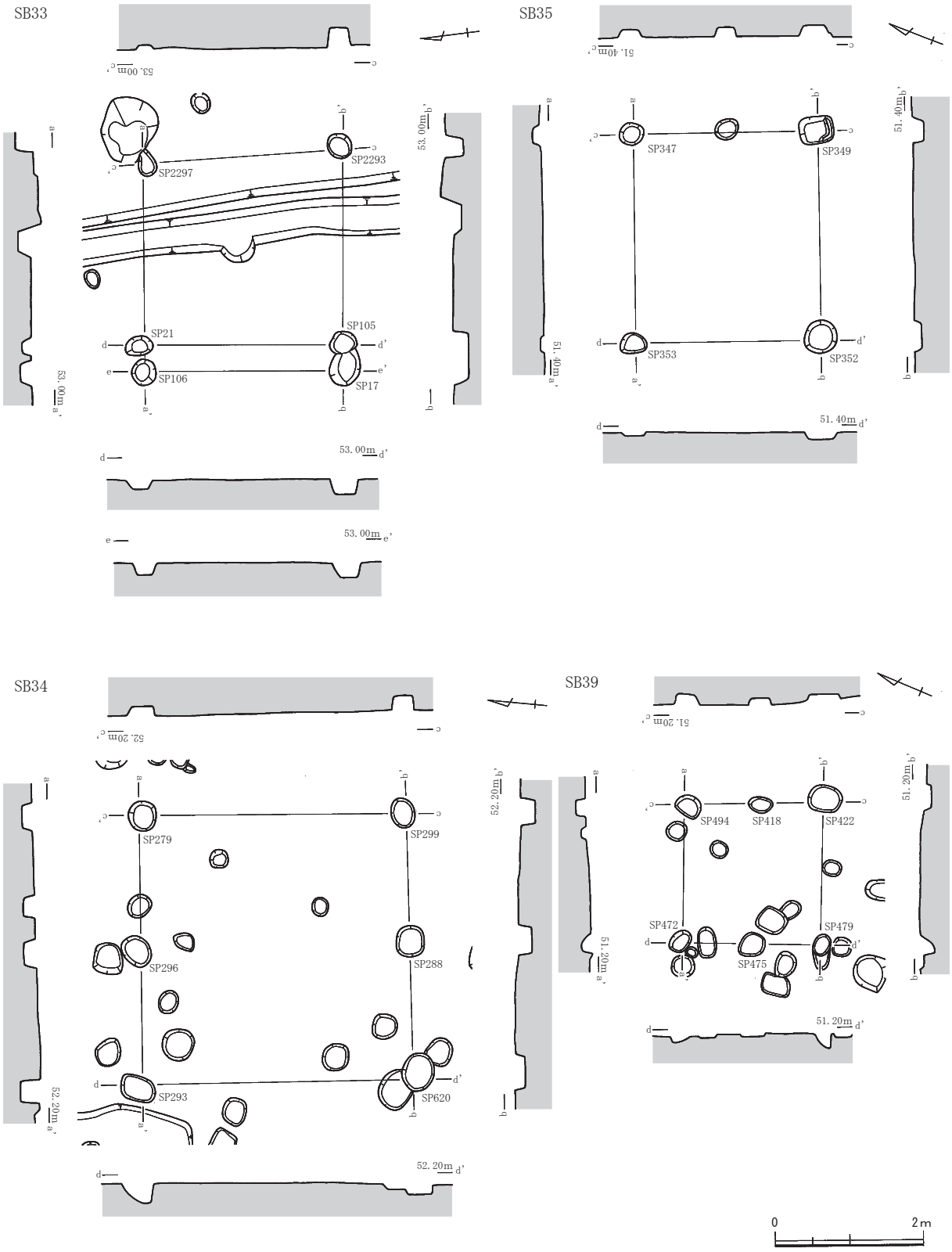
１・６区のＣ26において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。西側柱穴列はSP21・SP106とSP17・SP105が近接して存在しており、建て替えが行われたと推定される。SP17とSP105は切り合っており、SP105が後出の柱穴であった。SP17・106・2293・2297で構成される古段階の建物では、



第21図　遺構実測図16（縮尺1/80）

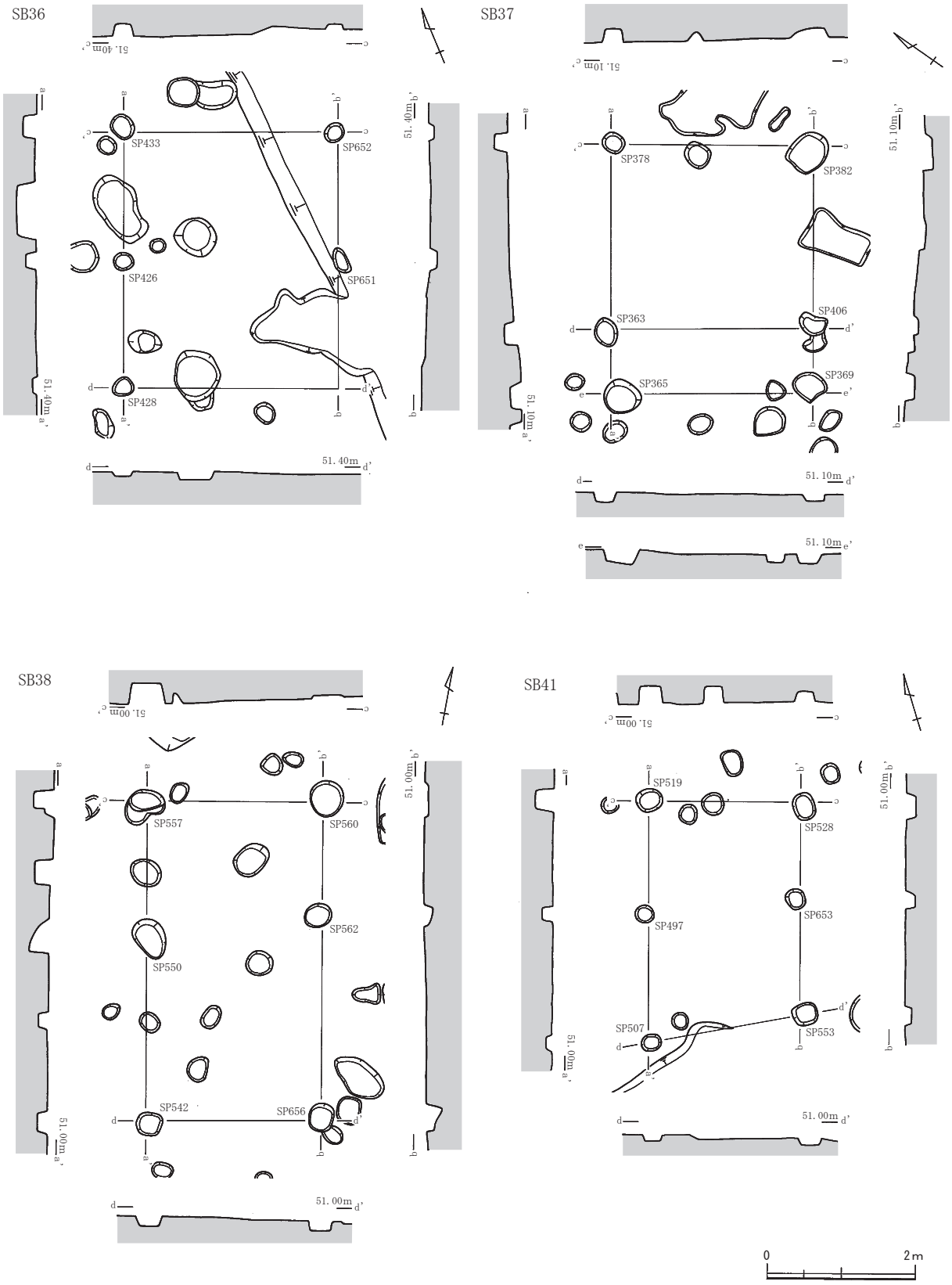


第22図　遺構実測図17（縮尺1/80）



第23図　遺構実測図18（縮尺1/80）

桁行長は北側柱穴列で約2.80m、南側柱穴列で約2.98m、梁行長は東側柱穴列で約2.73m、西側柱穴列で約2.70mをはかる。SP21・105・2293・2297で構成される新段階の建物では、北側柱穴列が約2.44m、南側柱穴列が約2.63mと短くなる。桁行方位は、SP17・106・2293・2297で構成される建物を基準



第24図　遺構実測図19（縮尺1/80）

にすると、約Ｎ－84°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.36～0.54ｍ、短軸約0.24～0.41ｍ、深さ

約0.06～0.27ｍをはかる。

SB34（第23図）

２区のＤ23・Ｄ24において検出した、南北１間×東西２間をはかる側柱建物である。北側柱穴列で約3.63ｍ、南側柱穴列で約3.59ｍ、東側柱穴列で約3.61ｍ、西側柱穴列で約3.64ｍをはかる。各柱穴列の長さが近似しているため、桁行・梁行の区別が判然としない。東西の柱穴列を桁行と仮定すると、桁行方位は約Ｎ－７°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.40～0.52ｍ、短軸約0.31～0.42ｍ、深さ約0.13～0.27ｍをはかる。

SB35（第23図）

２区のＤ21・Ｇ21において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は約2.82ｍ、梁行長は約2.49ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－68°－Ｅをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.34～0.46ｍ、短軸約0.26～0.44ｍ、深さ約0.05～0.16ｍをはかる。

SB36（第24図）

２区のＤ20・Ｅ20において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約3.44ｍ、梁行長約2.91ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－24°－Ｅをはかる。東側柱穴列は削平を受けており、SP651・652は底部のみの検出にとどまり、かつ南東隅の柱穴が失われている。各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.27～0.36ｍ、短軸約0.19～0.29ｍ、深さ約0.06～0.17ｍをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB37（第24図）

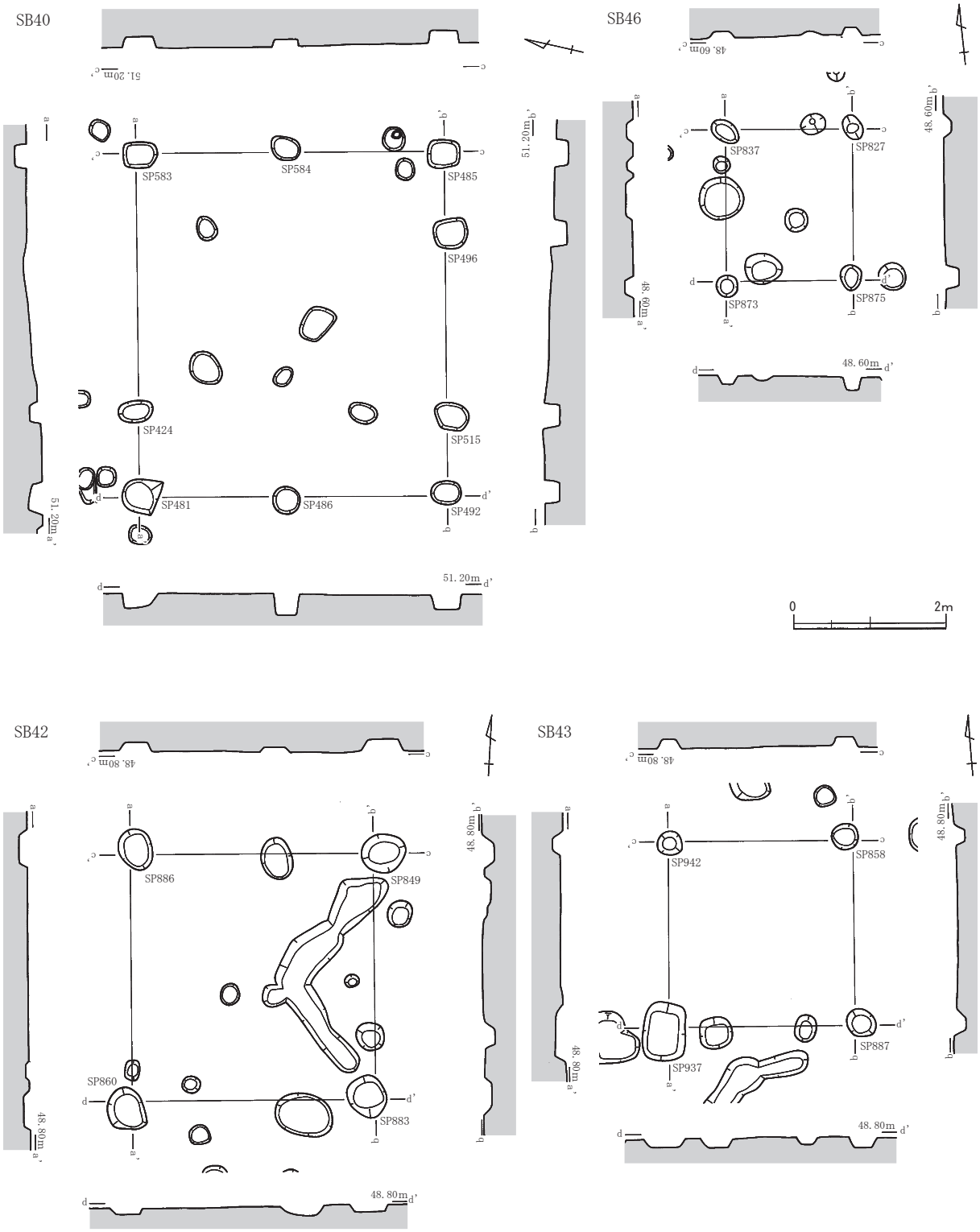
２区のＣ19において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。なお、建物の西側にはSP365・369が設けられており、廂状の付属施設が伴っていたと推定される。柱穴列の長さに基づけば、SP363・378・382・406で構成される身舎は桁行を南北方向に持つことになる。身舎の桁行長は約2.74ｍ、梁行長は約2.48ｍをはかる。廂を含めた梁行長は、北側柱穴列で約3.36ｍ、南側柱穴列で約3.33ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－35°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される身舎の平面形は、やや不整な長方形を呈する。身舎を構成する柱穴は、長軸約0.30～0.56ｍ、短軸約0.26～0.47ｍ、深さ約0.10～0.18ｍをはかる。廂を構成する柱穴は、長軸約0.46～0.50ｍ、短軸約0.41～0.46ｍ、深さ約0.12～0.20ｍをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB38（第24図）

２区のＤ18において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は約4.30ｍ、梁行長は約2.37ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－11.5°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸0.36～0.57ｍ、短軸約0.32～0.45ｍ、深さ約0.05～0.28ｍをはかる。なお、東側柱穴列中央のSP562は北側に偏って設けられているため、建物を構成する柱穴ではない可能性も指摘できる。この場合、SB38はSB３・５・14・45・60と同じく、桁行柱穴列の片側において間柱の柱穴を設けずに中抜けとなる建物に復元できよう。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。



第25図　遺構実測図20（縮尺1/80）

SB39（第23図）

２区のＥ19において検出した、南北２間×東西１間をはかる側柱建物である。北側柱穴列は約1.86ｍ、南側柱穴列で約1.92ｍ、梁行長は東側柱穴列で約1.87ｍ、西側柱穴列で約1.85ｍをはかる。各柱穴列の長さが近似しているため、桁行・梁行の区別がつかない。東西の柱穴列を桁行と仮定すると、桁

行方位は東側柱穴列で約Ｎ－24°－Ｅ、西側柱穴列で約Ｎ－22°－Ｗをはかる。各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.29～0.46ｍ、短軸約0.22～0.36ｍ、深さ約0.04～0.20ｍをはかる。

SB40（第25図）

２区のＥ18・Ｅ19において検出した、桁行３間×梁行２間をはかる側柱建物である。桁行長は約4.51ｍ、梁行長は約4.05ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－77°－Ｅをはかる。桁行の中央のみ柱間が広くとられている。なお、北側柱穴列ではSP424・583間の間柱の柱穴が検出できなかった。削平により失われた可能性もある。各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.36～0.58ｍ、短軸約0.28～0.51ｍ、深さ約0.10～0.28ｍをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB41（第24図）

２区のＥ18・Ｆ18区において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約2.88ｍ、西側柱穴列で約3.26ｍ、梁行長は北側柱穴列で約2.07ｍ、南側柱穴列で約2.10ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－17°－Ｅをはかる。南西隅のSP507が南側にずれているため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.26～0.36ｍ、短軸約0.22～0.30ｍ、深さ約0.08～0.25ｍをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB42（第25図）

３区のＮ11・Ｎ12において検出した、南北１間×東西１間をはかる側柱建物である。北側・南側柱穴列は約3.18ｍ、東側・西側柱穴列は約3.22ｍをはかる。各柱穴列の長さが近似しているため、桁行・梁行の区別がつかない。東西の柱穴列を桁行と仮定すると、桁行方位は、約Ｎ－３°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸0.45～0.59ｍ、短軸約0.44～0.51ｍ、深さ約0.08～0.16ｍをはかる。

SB43（第25図）

３区のＮ11・Ｎ12において検出した、南北１間×東西１間をはかる側柱建物である。北側・南側柱穴列は約2.42ｍ、東側・西側柱穴列は約2.44ｍをはかる。各柱穴列の長さが近似しているため、桁行・梁行の区別がつかない。東西の柱穴列を桁行と仮定すると、桁行方位は約Ｎ－４°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.34～0.76ｍ、短軸約0.33～0.56ｍ、深さ約0.13～0.15ｍをはかる。

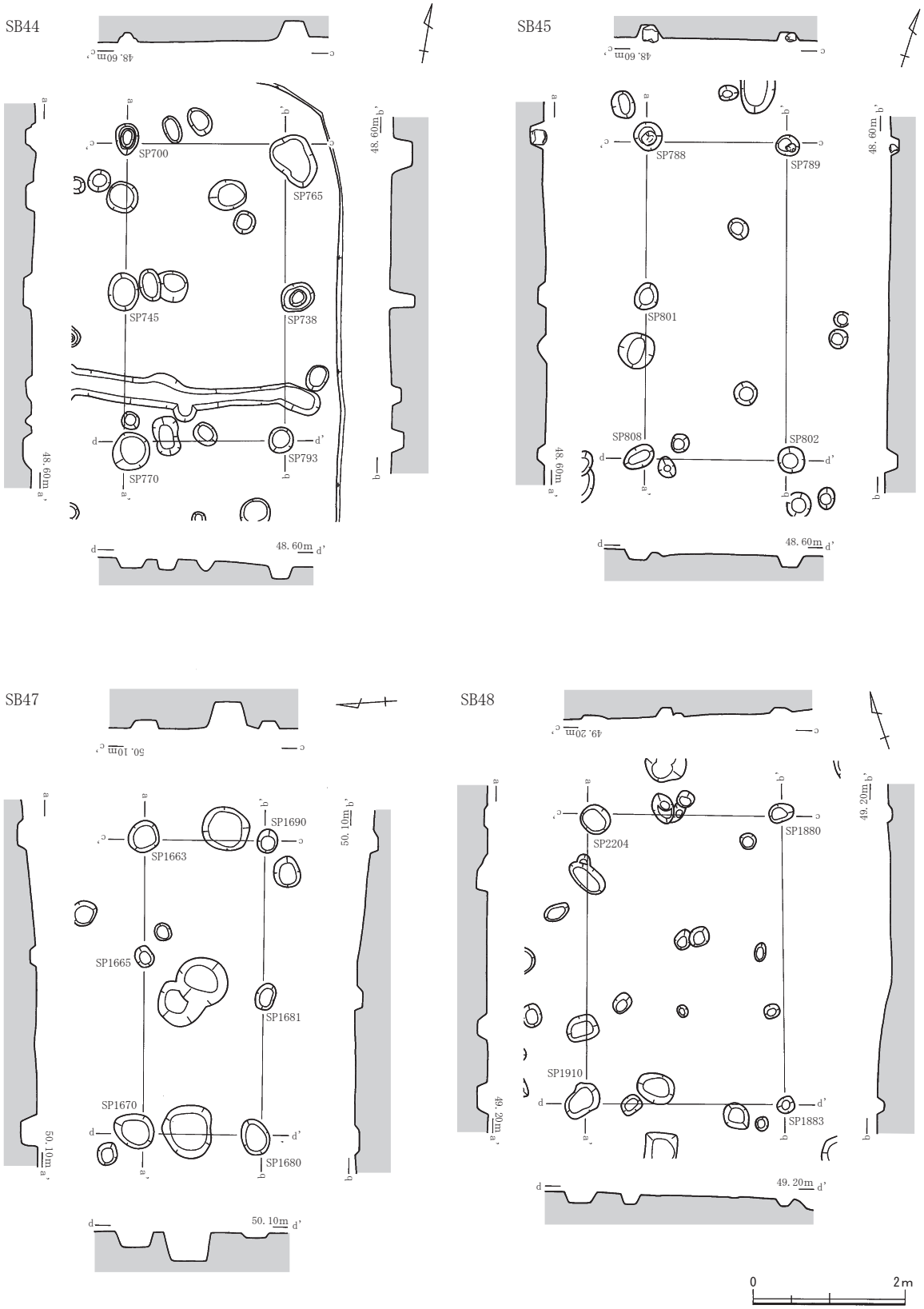
柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB44（第26図）

３区のＬ10・Ｌ11において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約3.93ｍ、梁行長約2.12ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－９°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.35～0.71ｍ、短軸約0.29～0.54ｍ、深さ約0.10～0.35ｍをはかる。

SB45（第26図）

３区のM10・M11において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は約4.16ｍ、梁行長は約1.85ｍをはかる。桁行方位は、約Ｎ－17°－Ｗをはかる。なお、東側柱穴列では中間の



第26図　遺構実測図21（縮尺1/80）

間柱の柱穴が検出できなかった。削平により失われた可能性もある。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.31

～0.43m、短軸約0.27～0.36m、深さ約0.10～0.18mをはかる。なお、SP788・789には柱根が遺存していた。

SB46（第25図）

３区のN10・N11において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は約1.98m、梁行長は約1.65mをはかる。桁行方位は、約N－５°－Wをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.27～0.39m、短軸約0.23～0.27m、深さ約0.08～0.17mをはかる。

SB47（第26図）

５区のF15において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約3.88m、梁行長約1.58mをはかる。桁行方位は、約N－87°－Wをはかる。なお、柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.27～0.55m、短軸約0.23～0.44m、深さ約0.06～0.22mをはかる。なお、東側柱穴列中央のSP1665は東側に偏って設けられているため、建物を構成する柱穴ではない可能性も指摘できる。この場合、SB47はSB３・５・14・45・60と同じく、桁行柱穴列の片側において間柱の柱穴を設けずに中抜けとなる建物に復元できよう。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB48（第26図）

５区のF12・F13において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約3.80m、西側柱穴列で約3.82m、梁行長は北側柱穴列で約2.55m、南側柱穴列で約2.62mをはかる。桁行方位は、約N－20°－Eをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.23～0.50m、短軸約0.21～0.35m、深さ約0.04～0.14mをはかる。

SB49（第27図）

５区のG13・G14において検出した、桁行１間×梁行２間をはかる側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約3.68m、南側柱穴列で約3.35m、梁行長は東側柱穴列で約3.16m、西側柱穴列で約3.13mをはかる。桁行方位は、約N－82°－Wをはかる。北西隅のSP1895が西側にずれて配置されているため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.31～0.46m、短軸約0.26～0.33m、深さ約0.04～0.15mをはかる。

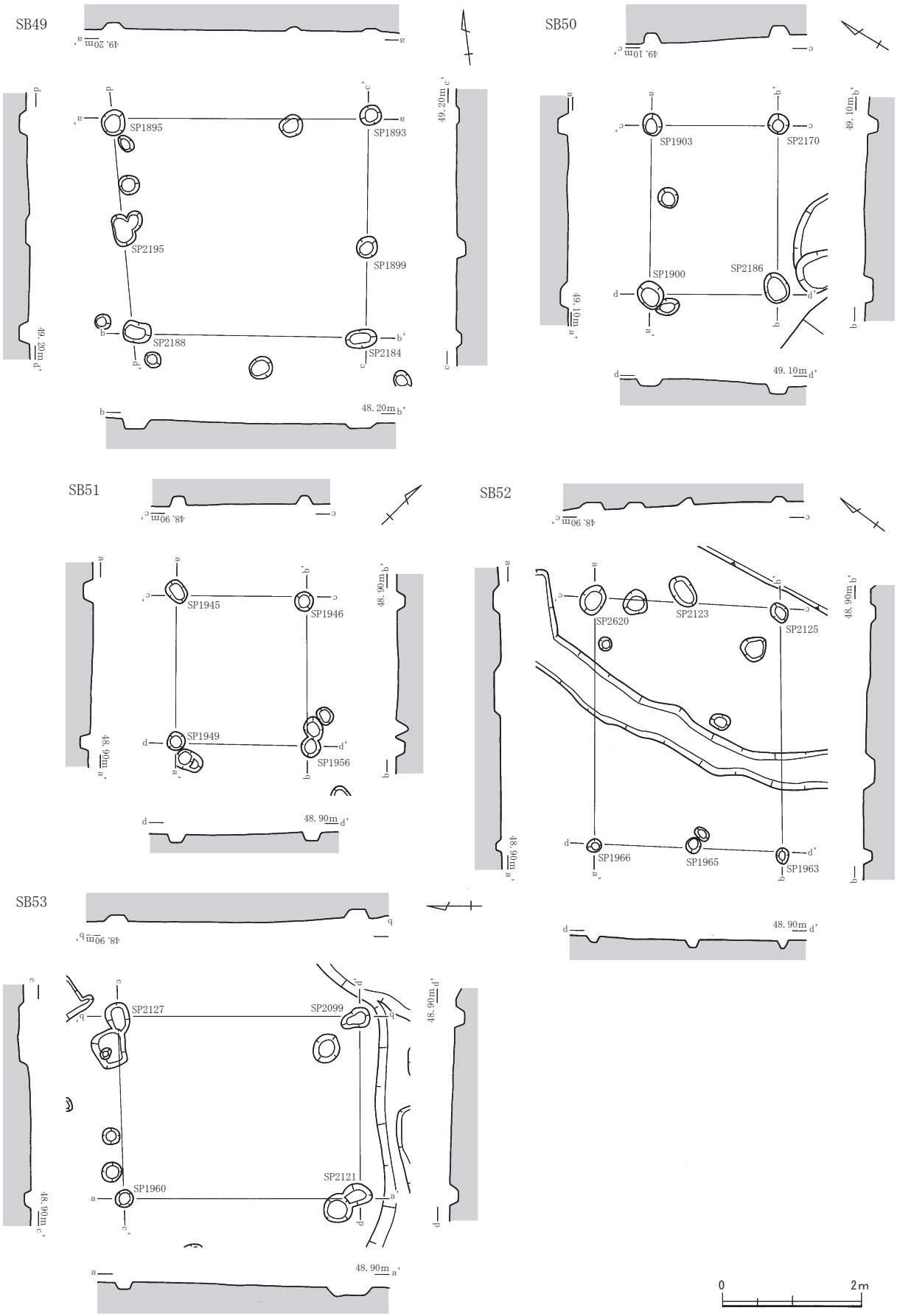
SB50（第27図）

５区のG12・G13において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約2.43m、梁行長約1.85mをはかる。桁行方位は、約N－60°－Eをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.30～0.44m、短軸約0.27～0.35m、深さ0.11～0.16mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB51（第27図）

５区のF12・G11・G12において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約2.14m、南側柱穴列で約2.12m、梁行長は約1.39mをはかる。桁行方位は、約N－45°－Wをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方



第27図　遺構実測図22（縮尺1/80）

形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.26～0.34m、短軸約0.25～0.28m、深さ約0.12～0.14mをはかる。

SB52（第27図）

５区のＦ11・Ｇ11において検出した、桁行１間×梁行２間をはかる側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約3.54m、南側柱穴列で約3.50m、梁行長は東側柱穴列で約2.68m、西側柱穴列で約2.73mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－54°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.21～0.49m、短軸約0.19～0.34m、深さ約0.08～0.12mをはかる。

SB53（第27図）

５区のＧ11において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は約2.64m、梁行長は東側柱穴列で約3.47m、西側柱穴列で約3.40mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－１°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.26～0.45m、短軸約0.25～0.33m、深さ約0.08～0.14mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB54（第28図）

５区のＩ11において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は東側柱穴列で約4.67m、西側柱穴列で約4.62m、梁行長は約2.54mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－37.5°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.30～0.54m、短軸約0.26～0.46m、深さ約0.10～0.23mをはかる。

SB55（第28図）

５区のＪ11・Ｊ12・Ｋ11・Ｋ12において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は北側柱穴列で約3.53m、南側柱穴列で約3.45m、梁行長は東側柱穴列で約2.46m、西側柱穴列で約2.51mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－50°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.21～0.44m、短軸約0.20～0.40m、深さ約0.05～0.57mをはかる。なお、SP2000には柱根が遺存していた。

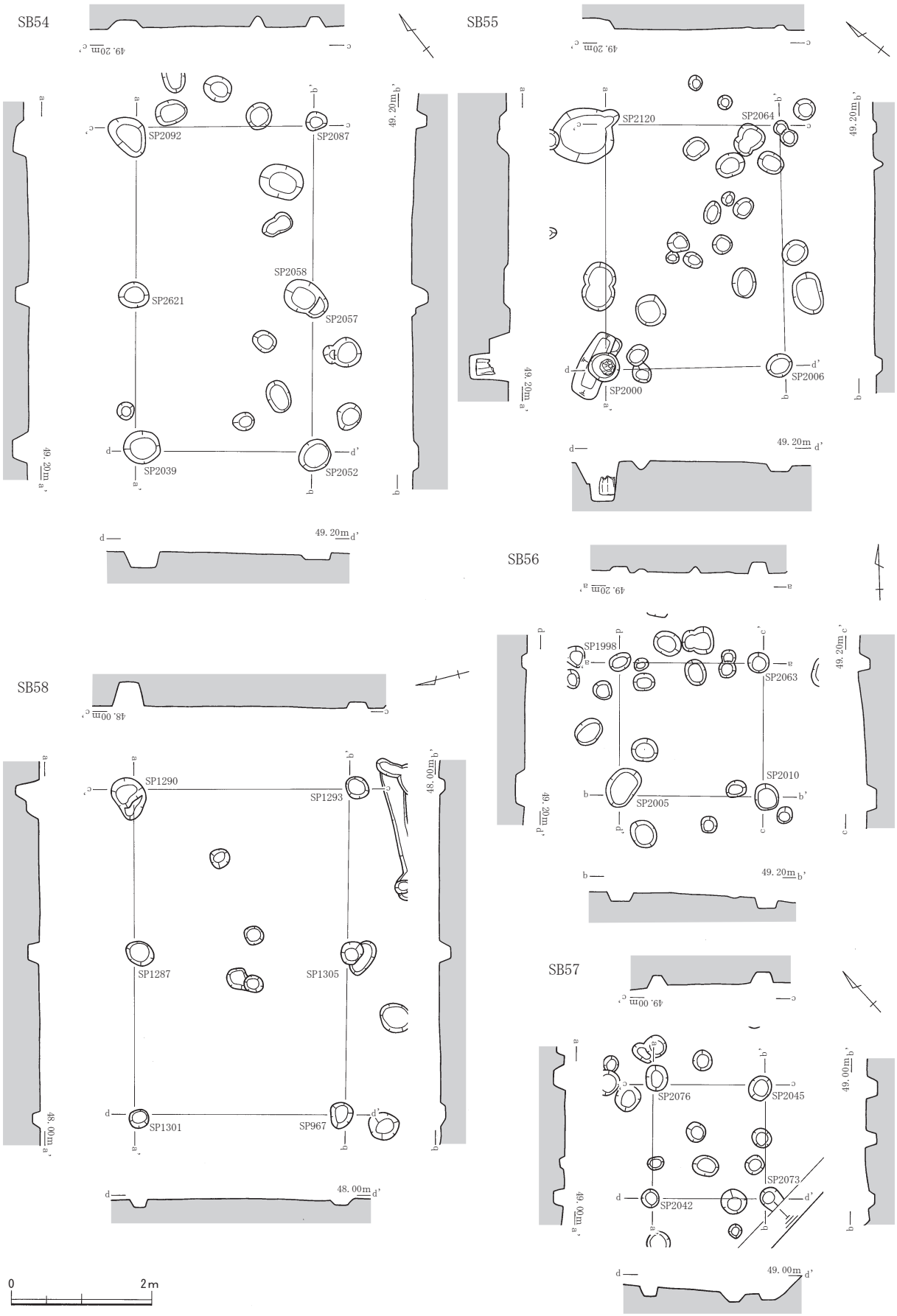
柱穴からは、時期不詳の土師質土器および青磁の微細片、更に漆器の微細な塗膜片が僅かに出土している。中世に属する建物と推定される。

SB56（第28図）

５区のＪ11・Ｋ11において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約2.06m、梁行長約1.90mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－87°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.31～0.50m、短軸約0.23～0.41m、深さ約0.07～0.17mをはかる。

SB57（第28図）

５区のＪ11・Ｋ11において検出した、南北１間×東西１間をはかる側柱建物である。北側・南側柱穴列は約1.64m、東側・西側柱穴列は約1.62mをはかる。各柱穴列の長さが近似しているため、桁行・梁行の区別がつかない。東西の柱穴列を桁行と仮定すると、桁行方位は約Ｎ－44°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な方形を呈する。建物を構成



第28図　遺構実測図23（縮尺1/80）

する柱穴は、長軸約0.27～0.38m、短軸約0.25～0.32m、深さ約0.09～0.19mをはかる。

SB58（第28図）

４区のＧ８・Ｈ８において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長は約4.66m、梁行長は約東側柱穴列で約3.08m、西側柱穴列で約3.02mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－77°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.27～0.48m、短軸約0.25～0.43m、深さ約0.09～0.34mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB59（第29図）

４区のＧ８・Ｈ８において検出した、桁行３間×梁行２間をはかる側柱建物である。桁行長は約4.94m、梁行長は約3.03mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－71°－Ｗをはかる。南側柱穴列では間柱の柱穴としてSP2622を１基のみを配しているため、北側柱穴列の柱間数とは整合しない。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.23～0.86m、短軸約0.19～0.65m、深さ約0.04～0.24mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の須恵器および土師質土器の微細片が僅かに出土している。少なくとも、古墳時代以降に属する建物と推定される。

SB60（第29図）

４区のＩ６・Ｉ７・Ｊ７において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約4.45m、梁行長約2.21mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－33°－Ｅをはかる。なお、西側柱穴列では中間の間柱の柱穴が検出できなかった。削平により失われた可能性もある。各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.42～0.59m、短軸約0.39～0.50m、深さ約0.10～0.35mをはかる。

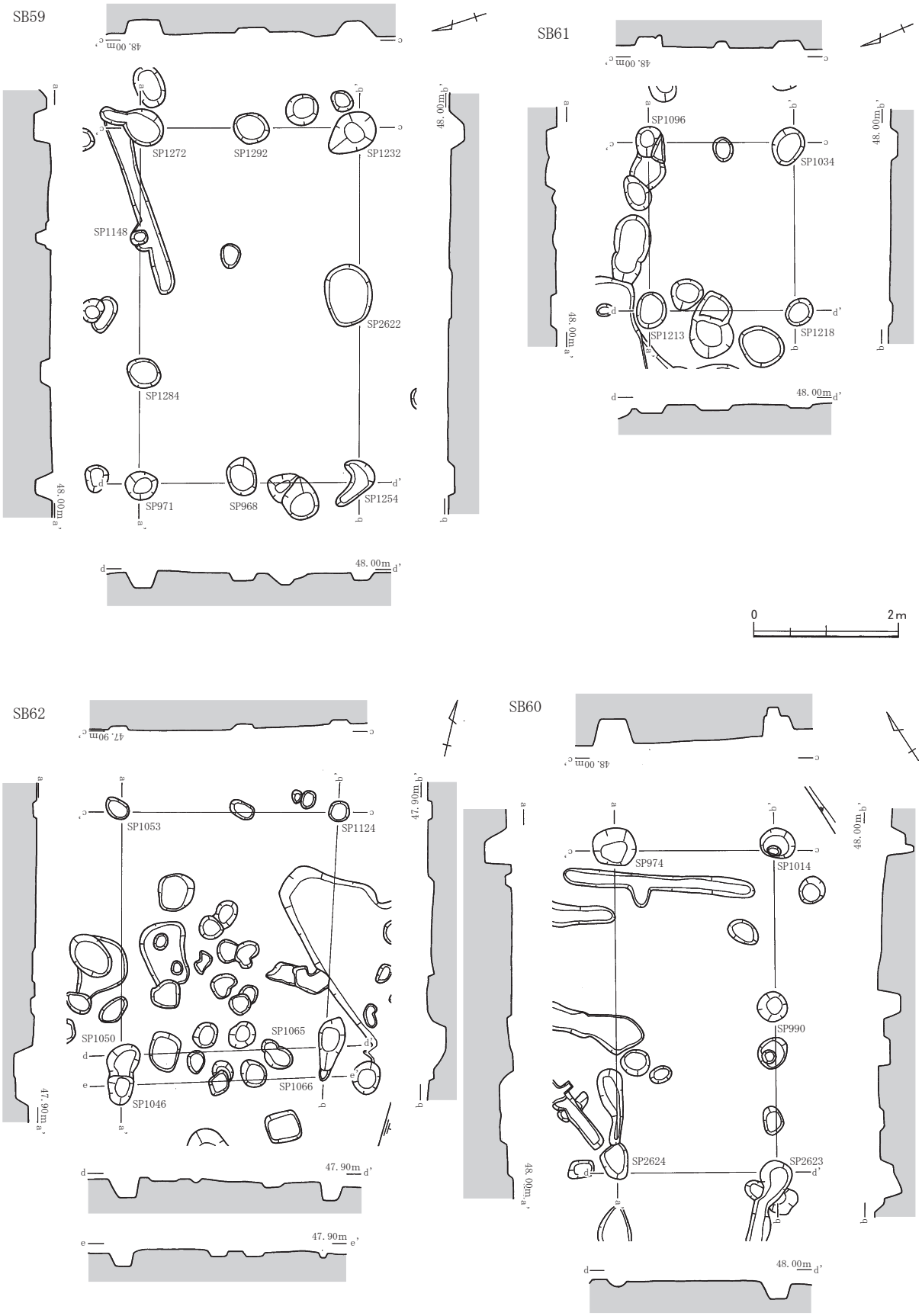
柱穴からは、時期不詳の土師質土器の微細片が僅かに出土している。

SB61（第29図）

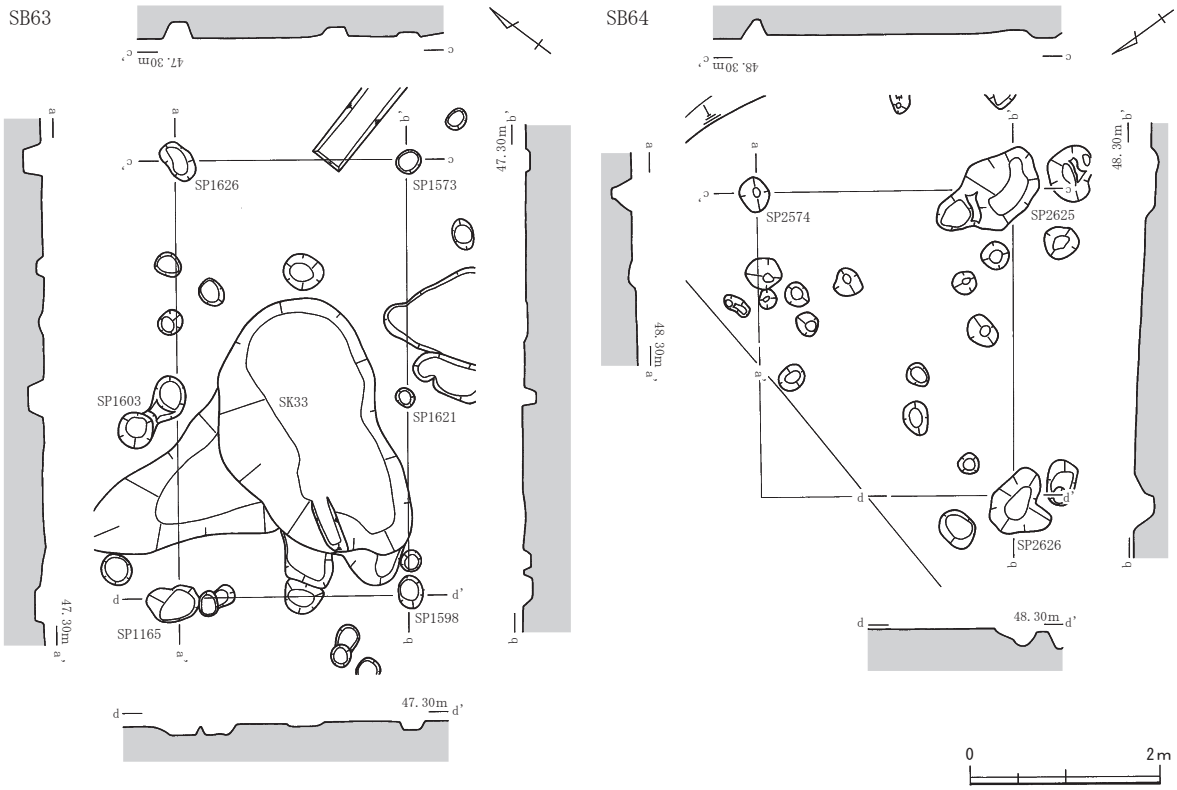
４区のJ７・J８において検出した、桁行１間×梁行１間の側柱建物である。桁行長約2.33m、梁行長約2.03mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－68°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.40～0.52m、短軸約0.35～0.43m、深さ約0.06～0.14mをはかる。

SB62（第29図）

４区のＪ６・Ｊ７において検出した、桁行１間×梁行１間をはかる側柱建物である。南側柱穴列はSP1046・SP1050とSP1065・SP1066が近接して存在しており、建て替えが行われたと推定される。SP1046・1050およびSP1065・1066では各々切り合っているが、SP1046・1050では先後関係は明確に捉えられなかった。一方のSP1065・1066では、SP1065が後出の柱穴であった。桁行長は、SP1046・1053・1066・1124で構成される古段階の建物では東側柱穴列は約3.67m、西側柱穴列で約3.78m、SP1050・1053・1065・1124で構成される新段階の建物では東側柱穴列で約3.26m、西側柱穴列で約3.36mをはかる。梁行長は、北側柱穴列で約3.00m、南側柱穴列は新・古ともに約2.82mをはかる。桁行方位は、東側柱穴列で約Ｎ－11°－Ｗ、西側柱穴列で約Ｎ－14°－Ｗをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.21～0.76m、



第29図　遺構実測図24（縮尺1/80）



第30図　遺構実測図25（縮尺1/80）

短軸約0.14～0.41m、深さ約0.06～0.27mをはかる。

SB63（第30図）

４区のＩ４において検出した、桁行２間×梁行１間をはかる側柱建物である。桁行長約4.60m、梁行長約2.44mをはかる。桁行方位は、約Ｎ－53°－Ｅをはかる。柱穴が整然と配置されていないため、各柱穴列で形成される平面形は、やや不整な長方形を呈する。建物を構成する柱穴は、長軸約0.20～0.55m、短軸約0.18～0.35m、深さ約0.04～0.18mをはかる。

柱穴からは、時期不詳の須恵器の微細片が僅かに出土している。少なくとも、古墳時代以降に属する建物と推定される。

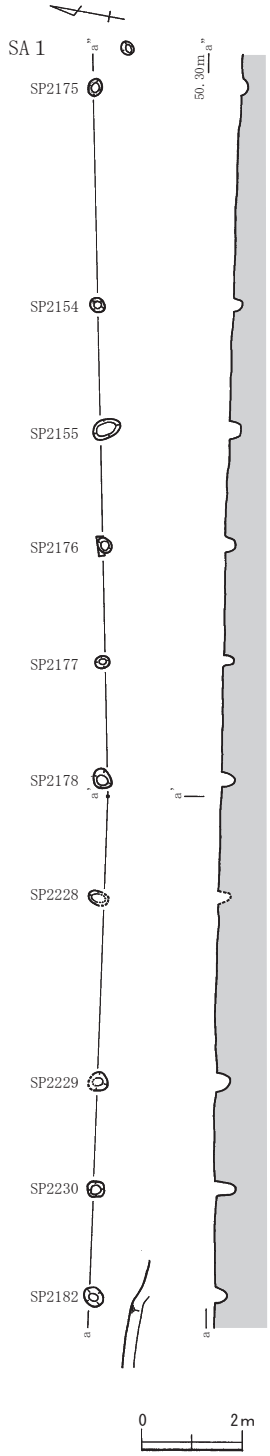
SB64（第30図）

７区のＩ10において検出した。７区の調査区北端に位置しているためＬ字状を呈する南側柱穴列と東側柱穴列のみの検出となった。このため建物の全容は明らかではないが、南北１間以上×東西１間以上をはかる建物であると推定される。南側柱穴列は約3.24m、東側柱穴列は約2.72mをはかる。南側柱穴列が桁行となる可能性が高く、その場合桁行方位は、約Ｎ－55°－Ｗをはかる。建物を構成する柱穴は、長軸約0.36～0.95m、短軸約0.31～0.73m、深さ約0.08～0.21mをはかる。

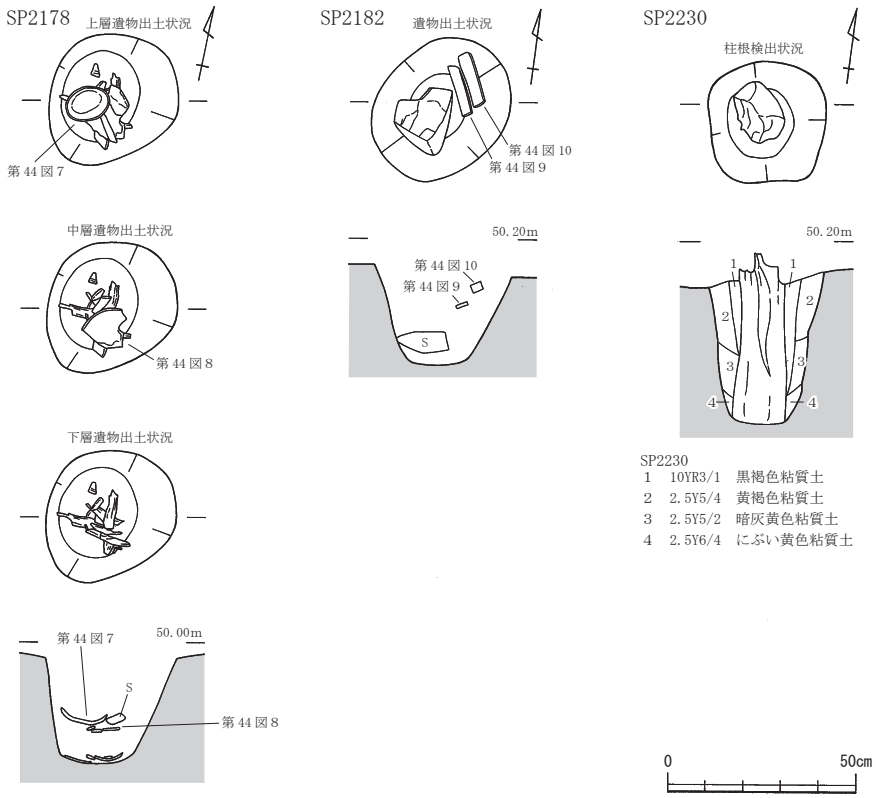
第３節　柵列（図版第29、第31・32図）

SA１（第31・32図）

５区のＫ14～16・Ｌ16にかけて検出した、柱穴列である。不等間隔ながら10基の柱穴より構成されるが、直線状に配置されておらず、中央部が僅かに南側に膨れる（第31図）。全長は直線距離で約23.68



第31図　遺構実測図26（縮尺1/150）



第32図　遺構実測図27（縮尺1/20）

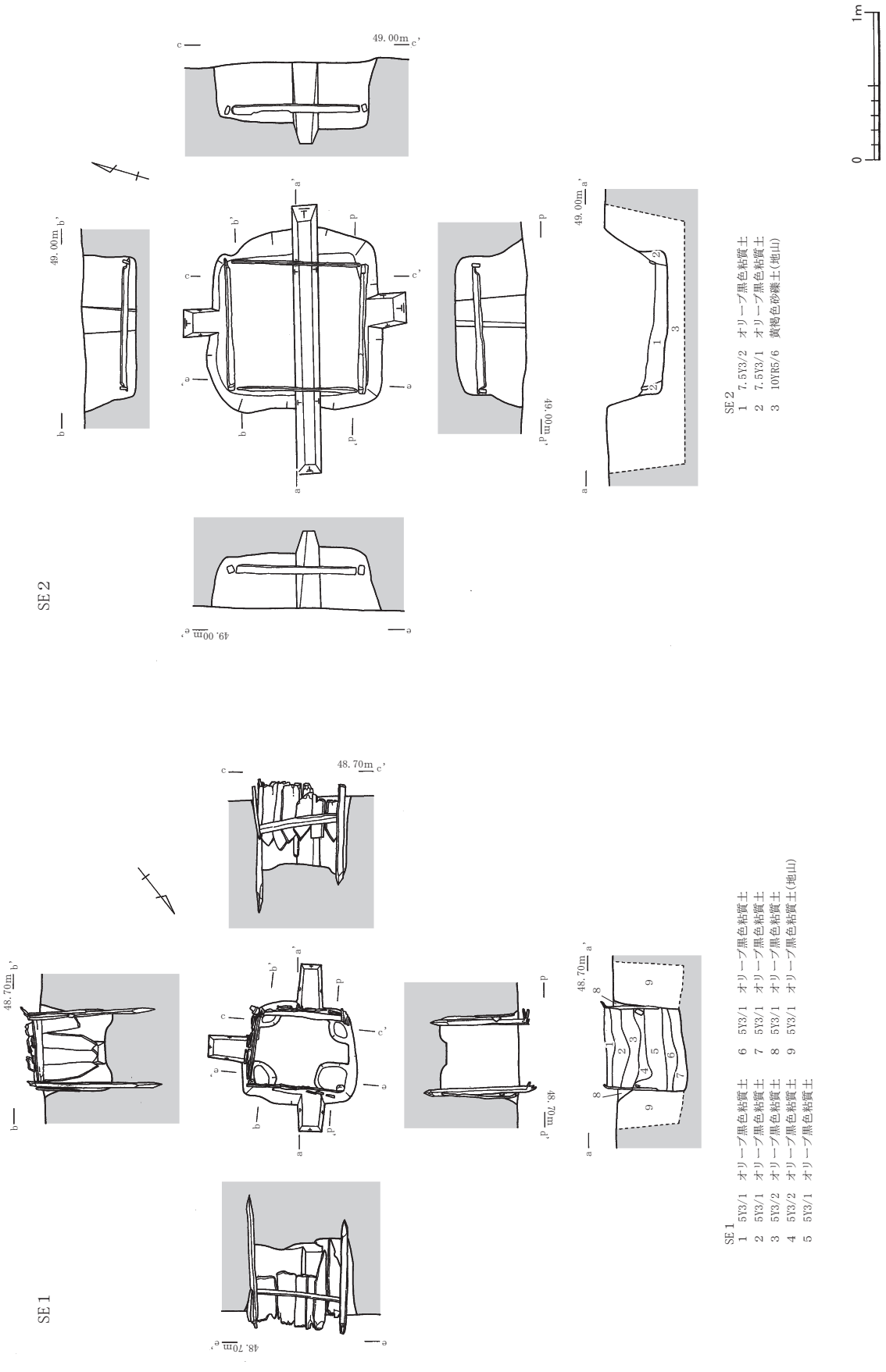
ｍをはかる。農道下での検出であったため柱穴の一部は農道下の埋設物に伴う工事により破壊されていたが、SP2230では柱根が遺存していた（第32図、第44図11）。柵列を構成する柱穴は、長軸約0.26～0.38ｍ、短軸約0.21～0.36ｍ、深さ約0.17～0.38ｍをはかる。

SA１を構成するSP2155・2176・2177・2178・2182からは、少量ながら土師皿の細片および漆器片・板材が出土している（第32図、第44図１～10）。また、SP2178の底面からは、腐朽のため原形が把握できないが、微細な薄い木片が多数まとまって出土した。中世に属する遺構と推定される。

第４節　井戸（図版第30、第33図）

SE１（第33図）

３区のN10において検出した。掘方の平面形は、長軸約0.77ｍ、短軸約0.69ｍをはかる方形を呈し、井戸枠上端からの深さは約0.62ｍをはかる。井戸枠は四隅に支柱を立て、壁面に板を縦位に並べる縦板組隅柱横桟留めの構造を呈する。井戸枠は長軸約0.65ｍ、短軸約0.55ｍをはかる長方形を呈するが、北西辺の縦板および横桟は遺存していない。残りの各辺は、幅0.10ｍ前後をはかる板材を４～６枚立てて井戸枠としている。板材の下端は三角形を呈しており、矢板状に底面に打ち込んで固定していた可能性がある。また、四隅の支柱についても下端が削られて鋭く仕上げられており、やはり底面に打ち込まれて固定されたものと考えられる。横桟は支柱にほぞ穴を設けて差し込むものではなく、単に支柱間にはめ込むように設置されていた。なお、井戸の底面については



第33図　遺構実測図28（縮尺1/40）

明確に捉えることができなかったが、縦板下端の形状から推定して標高48.30ｍの高さ、およそ５層上面が井戸底面であった可能性がある。

遺構内および掘方埋土からは、古墳時代の須恵器および中世の土師皿の細片が僅かに出土している（第44図12・13）。中世に属する遺構と推定される。

SE２（第33図）

３区のＯ13において検出した。平面形は長軸約1.21ｍ、短軸約1.19ｍをはかる方形を呈し、深さは約0.48ｍをはかる。削平のため底部のみの検出となった。底面には井桁状に組んだ板材が一段分遺存しており、本来は横板井籠組の井戸枠を有していたと推定される。井戸枠は、長さ約0.81～0.90ｍ、幅（高さ）約0.04～0.06ｍをはかる板材を方形に組んでおり、南北辺の板材の両端には東西辺の板材を組み合せるための欠き込みを有する。

遺構内からは、古代の須恵器および時期不詳の土師質土器の細片が出土している（第44図14・15）。古代に属する遺構と推定される。

第５節　土坑・柱穴（図版第31・32・35、第34・35・40図）

土坑（SK）・柱穴（SP）、および不整形な掘り込みを持つ遺構（SX）を一括して概説したい。

SK33（第34図）

４区のＩ４において検出した土坑である。平面形は、長軸約3.18ｍ、短軸約1.73ｍをはかる不整な楕円形を呈し、深さは約0.23ｍをはかる。底面は平坦なうえに壁の立ち上がりも緩やかで、全体的に浅皿状を呈する。遺構の形状から、土坑墓の可能性がある。

遺構内からは、弥生土器と安山岩の石核が出土している（第44図23・26）。弥生時代に属する遺構と推定される。

SK17（第35図）

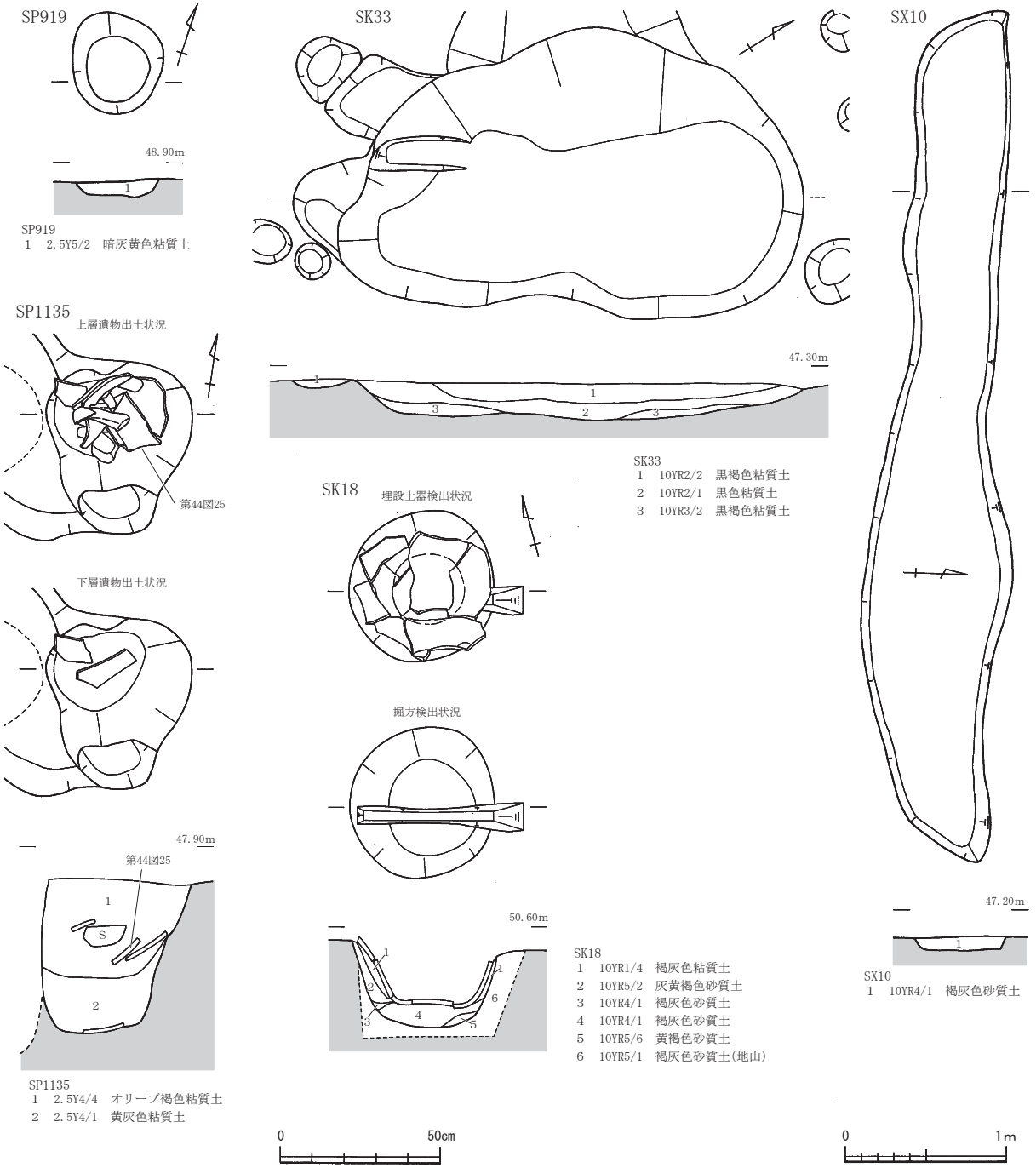
３区のM18・Ｎ18において検出した土坑である。平面形は長軸約1.80ｍ、短軸約1.68ｍをはかる不整な円形を呈し、深さは約0.21ｍをはかる。削平のため底部のみの検出にとどまった。土坑内には結桶が据えられていたと考えられるが、径約1.24ｍ、厚さ約0.04ｍをはかる底板のみが遺存していた。平面では土坑の掘方が明確に捉えきれず、掘方を確認するためにトレンチを入れて土層の差異から掘方の検出を行った。トレンチ内において色調の異なる土層（１層）が認められたため、現地調査段階ではこれを土坑内の埋土として掘方を検出した。しかし、後述するSK61・62の様相から、SK17の土坑埋土としたものは、色調の異なる地山層であった可能性がある。近世以降に属する遺構と推定される。

SK18（第34図）

３区のＮ19において検出した土坑である。平面形は長軸約0.96ｍ、短軸約0.90ｍをはかる略円形を呈し、深さは約0.55ｍをはかる。削平のため底部のみの検出にとどまるが、土坑内には産地不詳の磁器製の甕の底部が据えられていた。据えられた甕は器壁が厚く、厚さも均質であることから近・現代に属すると考えられ、遺構も近・現代に属すると推定される。

SK61（第35図）

７区のＬ９において検出した土坑である。平面形は長軸約1.44ｍ、短軸約1.36ｍをはかる略円形を呈し、深さは約0.15ｍをはかる。削平のため底部のみの検出にとどまった。土坑内には結桶を据えていたものと推定されるが、竹製の箍（たが）のみが3/4程度遺存していた。桶の板材は、転用のため抜かれたものと

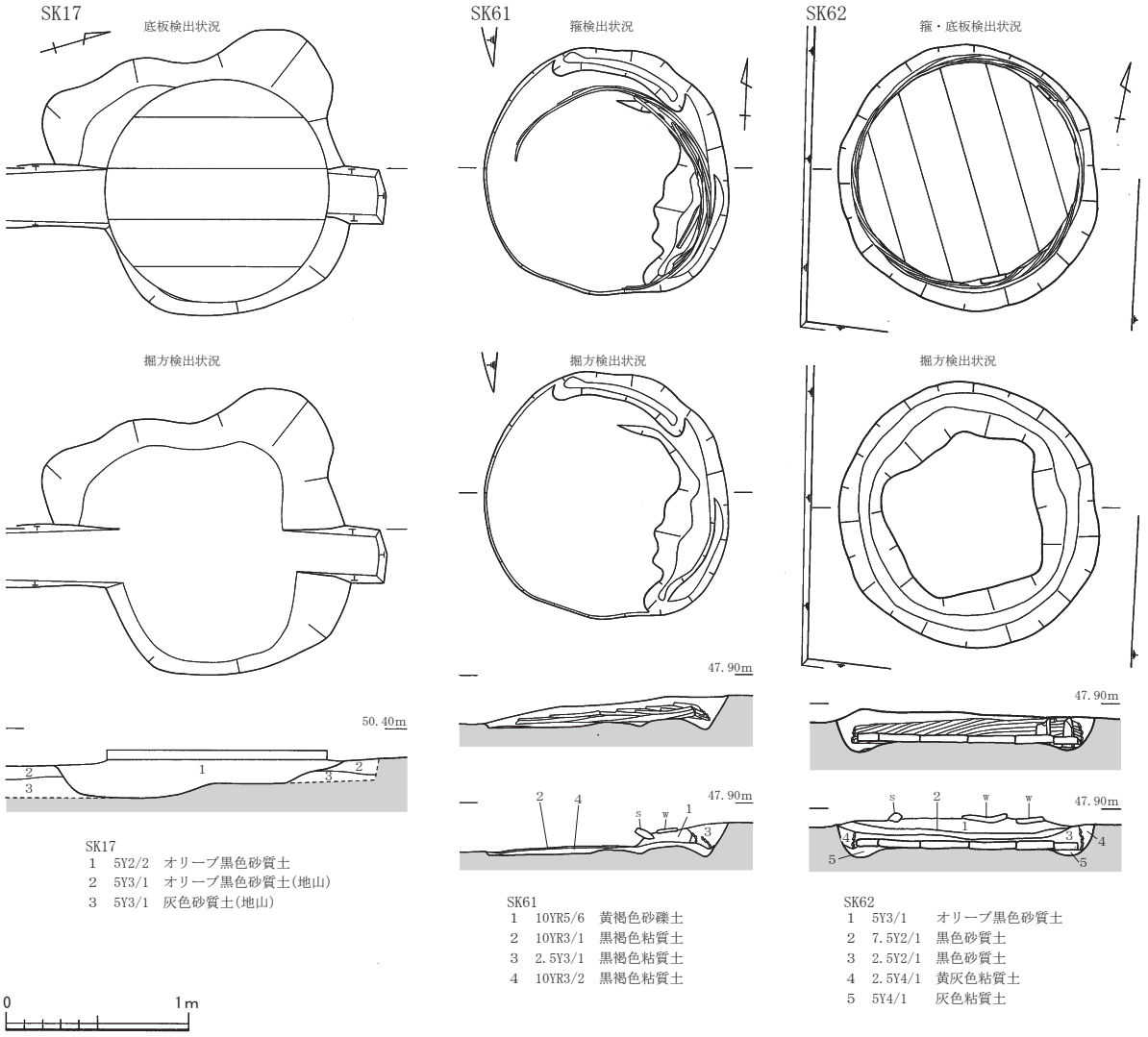


第34図　遺構実測図29（縮尺　SP：1/20、SK・SX：1/40）

考えられる。検出した箍（たが）は、土圧の影響を受けて内側に傾いた状態であり、やや歪んではいるが径約1.13m、高さは約0.08mをはかる。また、結桶を据えるためか、底面の外縁の一部を約0.13～0.40mの幅で弧状に掘り込んでいる。掘り込みの深さは、約0.01～0.06mをはかる。近世以降に属する遺構と推定される。

SK62（第35図）

７区のＮ９において検出した土坑である。土坑の平面形は長軸約1.47m、短軸約1.41mをはかる略円形を呈し、深さは約0.17mをはかる。削平のため底部のみの検出にとどまった。土坑内には結桶を据えていたものと推定されるが、底板と竹製の箍（たが）、縦板の一部のみが遺存していた。箍（たが）は、径約1.27m、高



第35図　遺構実測図30（縮尺1/40）

さ約0.13mをはかる。底板は径約1.20m、厚さ約0.04mをはかる。結桶を据えるためか、底面の外縁を約0.20～0.30mの幅で円環状に掘り込んでいる。掘り込みは約0.03～0.06mをはかる。

遺構内からは、肥前系磁器椀の細片が僅かに出土している（第44図20）。近世以降に属する遺構と推定される。

SP919（第34図）

３区のＮ12において検出した柱穴である。平面形は長軸約0.32m、短軸約0.28mをはかる不整な円形を呈し、深さは約0.06mをはかる。

遺構内からは、縄文土器の細片が僅かに出土している（第44図16～19）。縄文時代に属する遺構と推定される。

SP1135（第34図）

４区のＩ７において検出した柱穴である。SB19を構成するSP1109を切って構築されている。平面形は長軸約0.53m、短軸約0.45mをはかる不整な三角形を呈し、深さは約0.48mをはかる。

遺構内からは、越前焼の甕・土師皿の細片が出土している（第44図21・25）。中世に属する遺構と推定される。

SX９（第40図）

４区のＬ２・Ｍ２において検出した、不整形な落ち込みである。４区の調査区南東端で検出しており、遺構は調査区外にも広がる。検出した規模は南北約4.97ｍ、東西約3.76ｍをはかり、深さは約0.08～0.21ｍをはかる。底面は僅かに起伏を有し、堆積土層は細かくレンズ状に入り組んで堆積する。このような状況から、SX９は調査区の南東側に広がる低地部の肩部と推定される。なお、SX９の埋没後にSD61が設けられている。

遺構内からは、古墳時代の須恵器の細片が僅かに出土している（第44図22）。

SX10（第34図）

４区のＫ４・Ｋ５において検出した、不整形な掘り込みを持つ遺構である。北側は排水路敷設時の掘削により破壊されている。遺存値で長さ約5.26ｍ、最大幅約0.91ｍ、深さ約0.06～0.08ｍをはかる。

遺構内からは、弥生土器の細片が僅かに出土している（第44図24）。

第６節　河川・自然流路・溝（図版33～35、第５・36～40図）

曽根田遺跡では、河川・自然流路・溝を多数検出した。調査区全域が階段状に削平を受けているため、本来は一続きであった遺構を細切れとなって検出している可能性がある。このため、同一の遺構と推定しても異なる遺構番号を振っている場合もある。また、河川から派生した小規模な自然流路も存在したと推定される。人工的な溝との区別が明確ではないが、底面が平坦ではなく、起伏を有するものが自然流路の可能性がある。

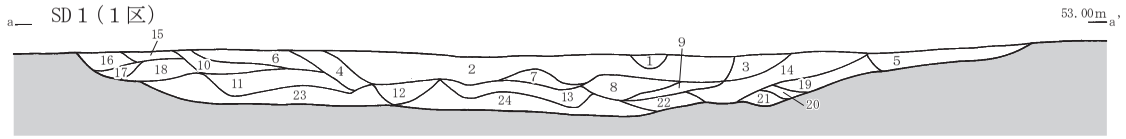
SD１（第５・36・37図）

１・２・４・５・６区のＣ～Ｈ列において検出した、調査区のほぼ中央部を西から東に向かって流れる河川である。削平のため所々寸断されて細切れのような状況で遺存しており、かつ底面のみの検出にとどまる箇所もあった。１区では支流であるSD５が北側に派生して、SD２に接続する。２区においては流路が扇状に広がり、少なくともSD１ａ～ｃの３条の流路に分かれるようである。しかしながら、削平が著しく底面の痕跡のみで、各流路の幅は正確には捉えられない。３条の流路の内、SD１aもしくはSD１ｂが２区の中央および５区を経て、４区へと連なるものと推定される。一方、SD１cは北西方から南東方に向かってのびるが、22列東端部で削平により途切れる。しかしながら、SD１ｃの南東方には自然流路と考えられるSD13が存在しており、本来はSD13に接続していた可能性がある。全体に階段状に削平されているため正確な川幅や深さは把握できないが、底面の痕跡も含めると遺存値で幅約0.28～12.42ｍ、深さ約0.03～0.99ｍをはかる。本来は幅10ｍ前後をはかっていたものと推定される。底面は比較的平坦ではあるが、所々水流の影響によって溝状もしくは土坑状に落ち込む箇所が存在する（第37図上段SD１の８～10層）。なお、４・５区間では、県道調査区で検出された「河川２」に接続する。

遺構内からは、縄文時代から古代の土器等の遺物が多数出土している（第45～52図）。

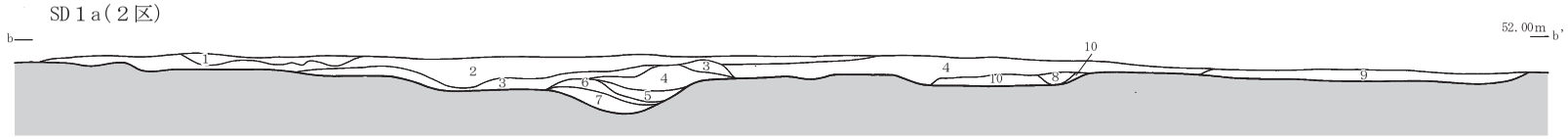
SD２（第５・37・38図）

１・２・５・６区のＡ～Ｄ列において検出した、調査区に北接する農道に沿うように検出した河川である。上黒田の谷部の中央に位置することから、谷を開析した旧黒田川と推定される。谷奥側にあたる西方より緩やかに蛇行しながら東方に流れ、５区の調査区北東隅でクランク状に屈曲し、県道調査区の「河川１」へとつながる。全体に階段状に削平されているため正確な河幅や深さは把握できないが、遺存値では幅約5.25～16.10ｍ、深さ約0.27～1.64ｍをはかる。底面は比較的平坦であるが、一部水流の



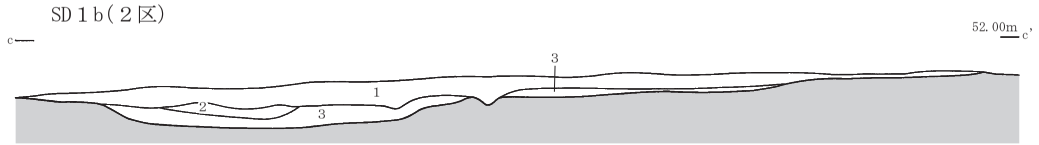
SD１（１区）

1	2.5GY5/1	オリーブ灰色粘質土	14	N3/	暗灰色粘質土
2	2.5Y3/1	黒褐色粘質土	15	10GY7/1	明緑灰色粘質土
3	N3/	暗灰色粘質土	16	5G6/1	緑灰色粘質土
4	N3/	暗灰色粘質土	17	N5/	灰色粘質土
5	N5/	灰色粘質土	18	N6/	灰色粘質土
6	7.5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	19	N4/	灰色粘質土
7	7.5Y3/2	オリーブ黒色粘質土	20	N4/	灰色粘質土
8	10Y4/1	灰色粘質土	21	N4/	灰色粘質土
9	7.5Y2/1	黒色粘質土	22	5Y3/2	オリーブ黒色粘質土
10	7.5Y5/1	灰色粘質土	23	7.5Y7/1	緑灰色粘質土
11	7.5Y4/1	灰色粘質土	24	7.5Y5/2	灰オリーブ色砂質土
12	10Y5/1	灰色粘質土			
13	2.5Y3/2	黒褐色粘質土			



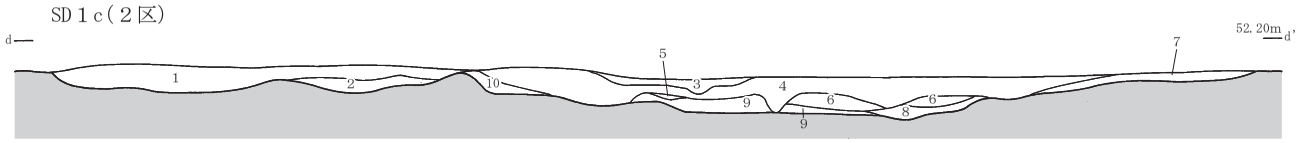
SD１a（２区）

1	2.5Y3/2	黒褐色粘質土	6	10YR4/1	褐灰色砂質土
2	10YR2/1	黒色粘質土	7	10YR4/1	褐灰色砂質土
3	10YR3/2	黒褐色砂質土	8	10YR3/1	黒褐色粘質土
4	10YR3/1	黒褐色粘質土	9	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土
5	10YR4/1	褐灰色砂質土	10	5Y4/3	暗オリーブ色粘質土



SD１b（２区）

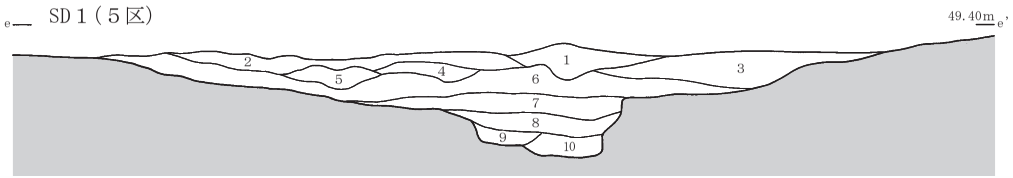
1	2.5Y2/1	黒色粘質土
2	2.5Y3/1	黒褐色砂質土
3	2.5Y4/1	黄灰色粘質土



SD１c（２区）

1	10YR3/1	黒褐色粘質土
2	10YR4/1	褐灰色粘質土
3	10YR2/2	黒褐色砂質土
4	10YR2/1	黒色粘質土
5	10YR3/1	黒褐色砂質土
6	10YR3/1	黒褐色砂質土
7	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
8	2.5Y4/1	黄灰色粘質土
9	5Y4/1	灰色粘質土
10	7.5Y5/1	灰色粘質土

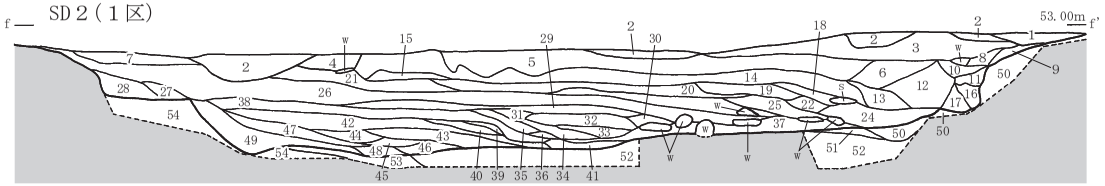
第36図　遺構実測図31（縮尺1/40）



SD１（５区）

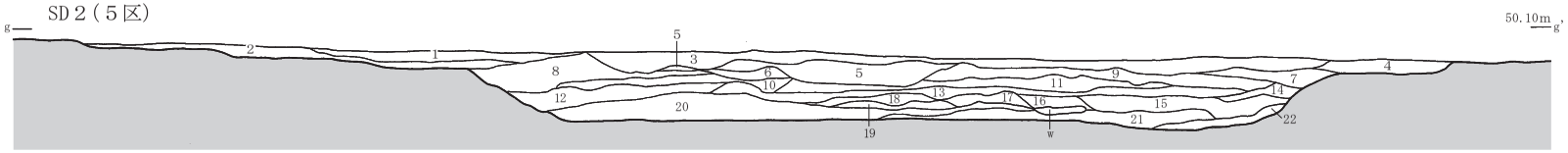
1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土
2	10YR3/2	黒褐色粘質土
3	10YR2/2	黒褐色粘質土
4	10YR3/2	黒褐色粘質土
5	10YR3/3	暗褐色粘質土
6	10YR3/1	黒褐色粘質土
7	10YR4/4	褐色粘質土
8	10YR2/2	黒褐色粘質土
9	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土
10	2.5Y3/2	黒褐色粘質土

0　1m



SD２（１区）

1	7.5Y5/1	灰色粘質土(攪乱)
2	5Y6/8	オリーブ色砂質土(攪乱)
3	2.5Y6/2	灰黄色粘質土(攪乱)
4	5Y4/3	暗オリーブ色砂質土(攪乱)
5	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土
6	10Y5/2	オリーブ灰色粘質土
7	5Y2/1	黒色粘質土
8	7.5Y4/2	灰オリーブ色砂質土
9	10Y6/1	灰色粘質土
10	7.5Y5/2	灰オリーブ色砂質土
11	7.5Y4/1	灰色粘質土
12	10Y6/2	オリーブ灰色砂質土
13	10Y6/2	オリーブ灰色粘質土
14	5Y3/2	オリーブ黒色粘質土
15	10Y6/2	オリーブ灰色粘質土
16	10Y3/2	オリーブ黒色砂質土
17	7.5Y4/2	灰オリーブ色砂質土
18	7.5Y6/3	オリーブ黄色粘質土
19	5Y5/3	灰オリーブ色砂質土
20	10Y6/2	オリーブ灰色粘質土
21	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
22	5Y4/2	灰オリーブ色粘質土
23	7.5Y5/3	灰オリーブ色砂質土
24	5Y6/3	オリーブ黄色粘質土
25	7.5Y6/3	オリーブ黄色粘質土
26	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
27	5Y5/2	灰色粘質土
28	10GY6/1	緑灰色砂質土
29	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
30	5Y4/1	灰色粘質土
31	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
32	5Y4/2	灰オリーブ色粘質土
33	5Y5/1	灰色粘質土
34	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
35	5Y5/2	灰オリーブ色粘質土
36	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
37	5Y4/2	灰オリーブ色粘質土
38	5Y5/2	灰オリーブ色粘質土
39	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
40	5Y6/6	オリーブ色砂質土
41	7.5Y6/1	灰色粘質土
42	5Y2/1	黒色粘質土
43	10GY7/1	明緑灰色砂質土
44	10G6/1	緑灰色粘質土
45	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土
46	10Y6/2	オリーブ灰色粘質土
47	10Y6/2	オリーブ灰色粘質土
48	10Y7/2	灰白色砂質土
49	5Y6/1	灰色粘質土
50	10Y7/2	灰白色粘質土(地山)
51	10Y4/1	灰色粘質土(地山)
52	10Y6/2	オリーブ灰色砂質土(地山)
53	10Y7/2	灰白色粘質土(地山)
54	10Y4/2	オリーブ灰色砂質土(地山)

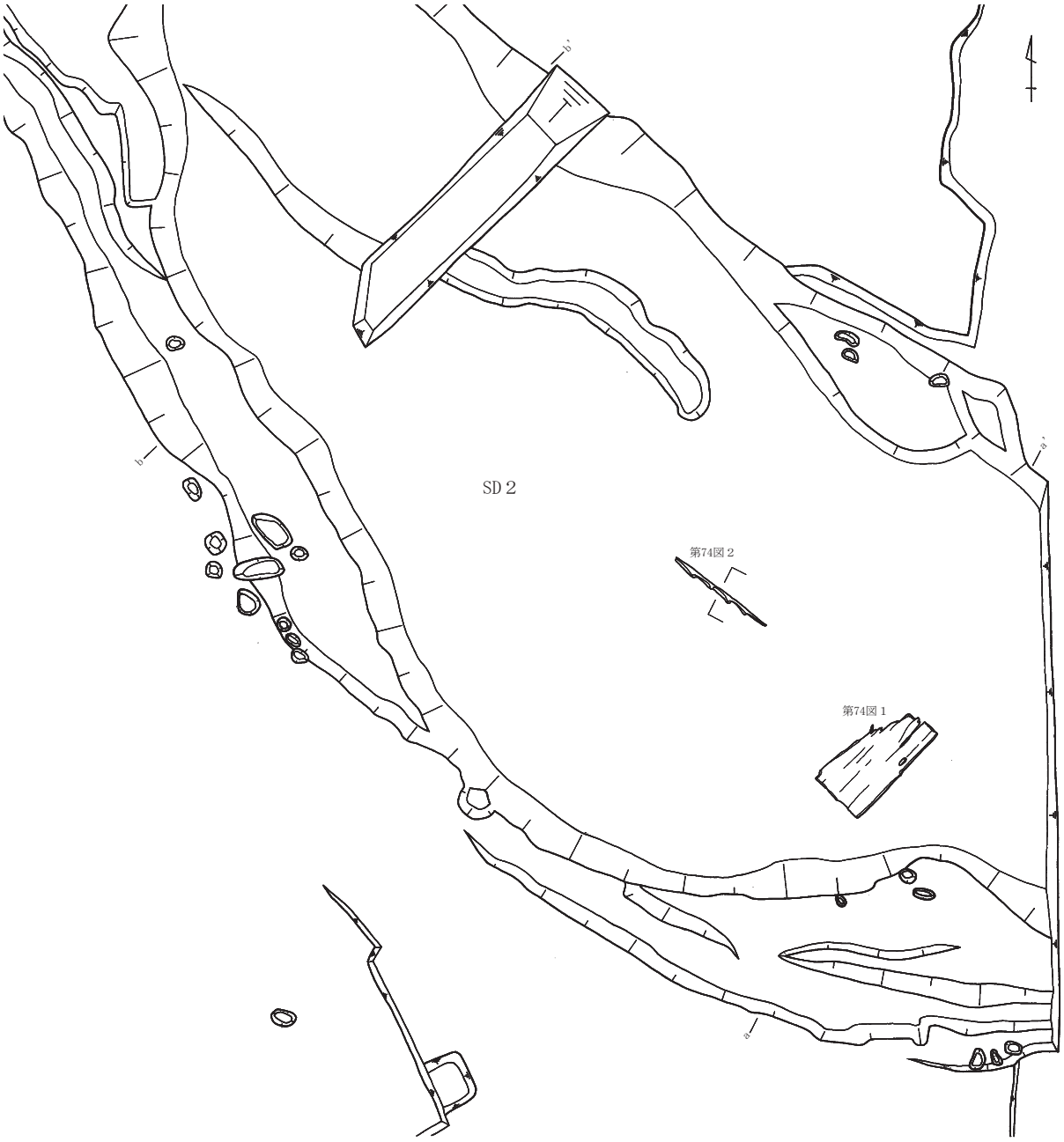


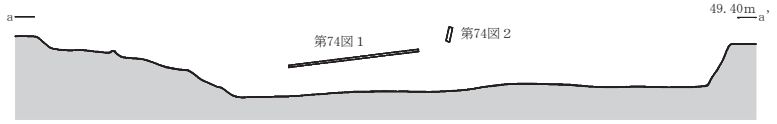
SD２（５区）

1	10YR3/2	黒褐色粘質土
2	2.5Y3/2	黒褐色粘質土
3	10YR3/2	黒褐色粘質土
4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土
5	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂質土
6	10YR3/2	黒褐色粘質土
7	10YR3/3	暗褐色粘質土
8	10YR2/1	黒褐色粘質土
9	2.5Y2/1	黒色粘質土
10	2.5Y4/1	黄灰色粘質土
11	5Y4/1	灰色粘質土
12	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土
13	2.5Y3/1	黒褐色粘質土
14	2.5Y3/2	黒褐色粘質土
15	2.5Y5/2	暗灰黄粘質土
16	2.5Y3/1	黒褐色砂質土
17	2.5Y5/1	黄灰色砂質土
18	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土
19	2.5Y4/1	黄灰色粘質土
20	2.5Y5/1	黄灰色粘質土
21	10YR4/4	褐色砂質土
22	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂質土

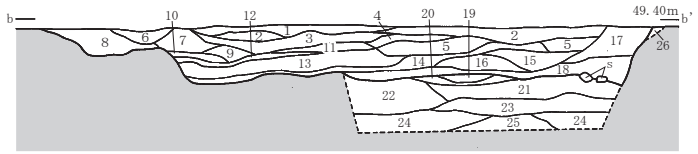
0　2m

第37図　遺構実測図32（縮尺　SD１：1/40、SD２：1/80）





※第74図２は投影



SD２

1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土	6	10YR2/2	黒褐色粘質土
2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土	7	10YR3/1	黒褐色粘質土
3	10YR2/1	黒色粘質土	8	10YR4/2	灰黄褐色粘質土
4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土	9	2.5Y3/1	黒褐色粘質土
5	10YR3/3	暗灰黄色粘質土	10	2.5Y3/1	黒褐色粘質土
11	5Y3/1	オリーブ黒色砂質土			
12	2.5Y3/1	黒褐色粘質土			
13	5Y3/2	オリーブ黒色砂質土			
14	2.5Y2/1	黒色粘質土			
15	2.5Y4/1	黄灰色砂質土			
16	2.5Y5/1	黄灰色砂質土			
17	2.5Y3/1	黒褐色粘質土			
18	5Y5/1	灰色砂質土			
19	2.5Y3/1	黒褐色粘質土(地山)			
20	2.5Y4/1	黄灰色砂質土(地山)			
21	5Y4/1	灰色粘質土(地山)			
22	5Y4/1	灰色粘質土(地山)			
23	5Y4/1	灰色粘質土(地山)			
24	5Y4/1	灰色粘質土(地山)			
25	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土(地山)			
26	2.5Y7/3	浅黄色粘質土(地山)			

0　2m

第38図　遺構実測図33（縮尺1/80）

影響で起伏に富む箇所がある。また、南側肩部には浅い溝状遺構が複数併行してのびている。恐らく、河川内の土砂堆積の進行に伴って河床が上昇した結果、河川の深度が浅くなり、それにより河川の増水時に河幅が拡大して肩部に細かな溝状の流路を形成したものと推定できる。この痕跡が、肩部で検出した複数の溝状遺構である。また、第37図中段（ｆ－ｆ’）の土層断面で確認した10・11・16層は、周囲の土層を断ち切るように堆積していることから、これも上昇した河床を水流が抉った痕跡であると考えられる。

SD２からは、縄文時代から古代にかけての土器等の遺物が多く出土している（第53～75図）。多少の混在は認められるものの埋土の上層からは須恵器が、下層からは弥生土器が、５区では最下層から縄文土器が出土した。第37図下段・第38図下段を参照すると、第38図下段（ｂ－ｂ’）では14～16・17層では縄文土器が、１～５・７・９～13層では弥生土器が出土し、６・８層からは須恵器が混在して出土した。第37図下段（ｇ－ｇ’）では、13・15層からは縄文土器が、７～11層からは弥生土器が出土し、６層以上から須恵器が混在して出土した。

また、木製品も多数出土しており、５区のＣ13・Ｃ14・Ｄ13では刻み梯子と扉板が出土した（第38図、第74図１・２）。流水の影響で、刻み梯子はSD２の流路の沿うような状態で出土している。一方の扉板は蛇行する流路の南岸寄りから出土しており、これも流水の影響で岸辺寄りに流れ着いたものと推定される。多くの木製品は、弥生土器を含む土層を中心に出土しており、このため木製品の大部分は弥生時代以降に帰属するものと推定される。

SD３（第５・39図）

１区のＢ26・Ｃ26において検出した溝である。南東から弧を描きながら北に向きを変え、そのまま直線的にのびてSD２と接続する。長さは直線距離で約14.66ｍ、幅約0.21～0.63ｍ、深さ約0.05～0.21ｍをはかる。SD３の東側にはSB４・33が構築されており、このことからSD３はSB４・33の敷地を区画する溝と考えられる。

SD５（第５・39図）

１区のＣ27・Ｃ28・Ｄ28において検出した河川である。SD１から派生してSD２へと連なる河川であり、SD１の支流と推定される。幅約1.57～3.55ｍ、深さ約0.45～0.93ｍをはかる。土層の堆積状況が複雑であるため、どの段階までSD１とSD２とを接続していたかを把握することはできなかった。

遺構内からは、弥生土器の細片が僅かに出土している（第76図１～３）。

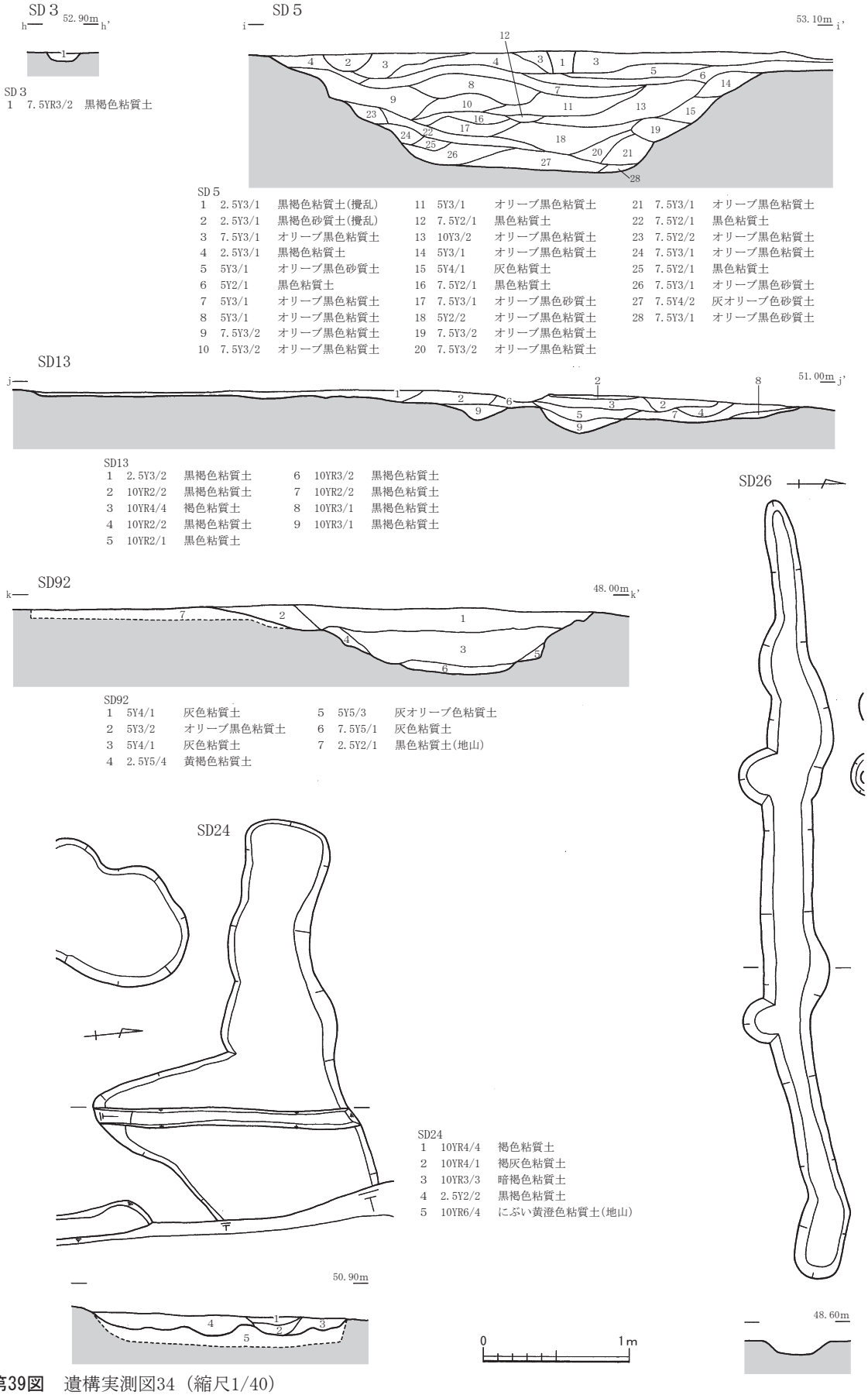
SD13（第５・39図）

２区のＩ18～21・J18～21・Ｋ18～21において検出した溝状遺構である。東端は削平されて遺存しないが、細い溝状の遺構が東西方向に蛇行しながら伸びており、その両肩部には浅皿状の落ち込みが東に向かって扇状に広がる。浅皿状の落ち込みを含めた最大幅は遺存値で約11.52ｍ、中の溝状遺構は幅約0.27～1.15ｍをはかる。深さは溝状遺構の肩部から底面までで約0.07～0.28ｍをはかる。SD13は自然流路と考えられ、位置関係からSD１ｃの一部になる可能性がある。

遺構内からは、古墳時代の須恵器の細片が僅かに出土している（第76図４）。

SD15・16（第８図）

２区のＢ18・Ｂ19・Ｃ18・Ｃ19において検出した溝状遺構である。６区で検出したSH５の周溝であるSD67・SD68と連なるかたちで検出した。ただし、幅が不揃いであるうえに、遺構底面が起伏に富む。加えて、底面において複数の柱穴を検出した。遺構の検出状況、土層の堆積状況等から判断して、SD15・



SD３
1　7.5YR3/2　黒褐色粘質土

SD５

1	2.5Y3/1	黒褐色粘質土(攪乱)	11	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	21	7.5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
2	2.5Y3/1	黒褐色砂質土(攪乱)	12	7.5Y2/1	黒色粘質土	22	7.5Y2/1	黒色粘質土
3	7.5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	13	10Y3/2	オリーブ黒色粘質土	23	7.5Y2/2	オリーブ黒色粘質土
4	2.5Y3/1	黒褐色粘質土	14	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	24	7.5Y3/1	オリーブ黒色粘質土
5	5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	15	5Y4/1	灰色粘質土	25	7.5Y2/1	黒色粘質土
6	5Y2/1	黒色粘質土	16	7.5Y2/1	黒色粘質土	26	7.5Y3/1	オリーブ黒色砂質土
7	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	17	7.5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	27	7.5Y4/2	灰オリーブ色砂質土
8	5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	18	5Y2/2	オリーブ黒色粘質土	28	7.5Y3/1	オリーブ黒色砂質土
9	7.5Y3/2	オリーブ黒色粘質土	19	7.5Y3/2	オリーブ黒色粘質土			
10	7.5Y3/2	オリーブ黒色粘質土	20	7.5Y3/2	オリーブ黒色粘質土			

SD13

1	2.5Y3/2	黒褐色粘質土	6	10YR3/2	黒褐色粘質土
2	10YR2/2	黒褐色粘質土	7	10YR2/2	黒褐色粘質土
3	10YR4/4	褐色粘質土	8	10YR3/1	黒褐色粘質土
4	10YR2/2	黒褐色粘質土	9	10YR3/1	黒褐色粘質土
5	10YR2/1	黒色粘質土			

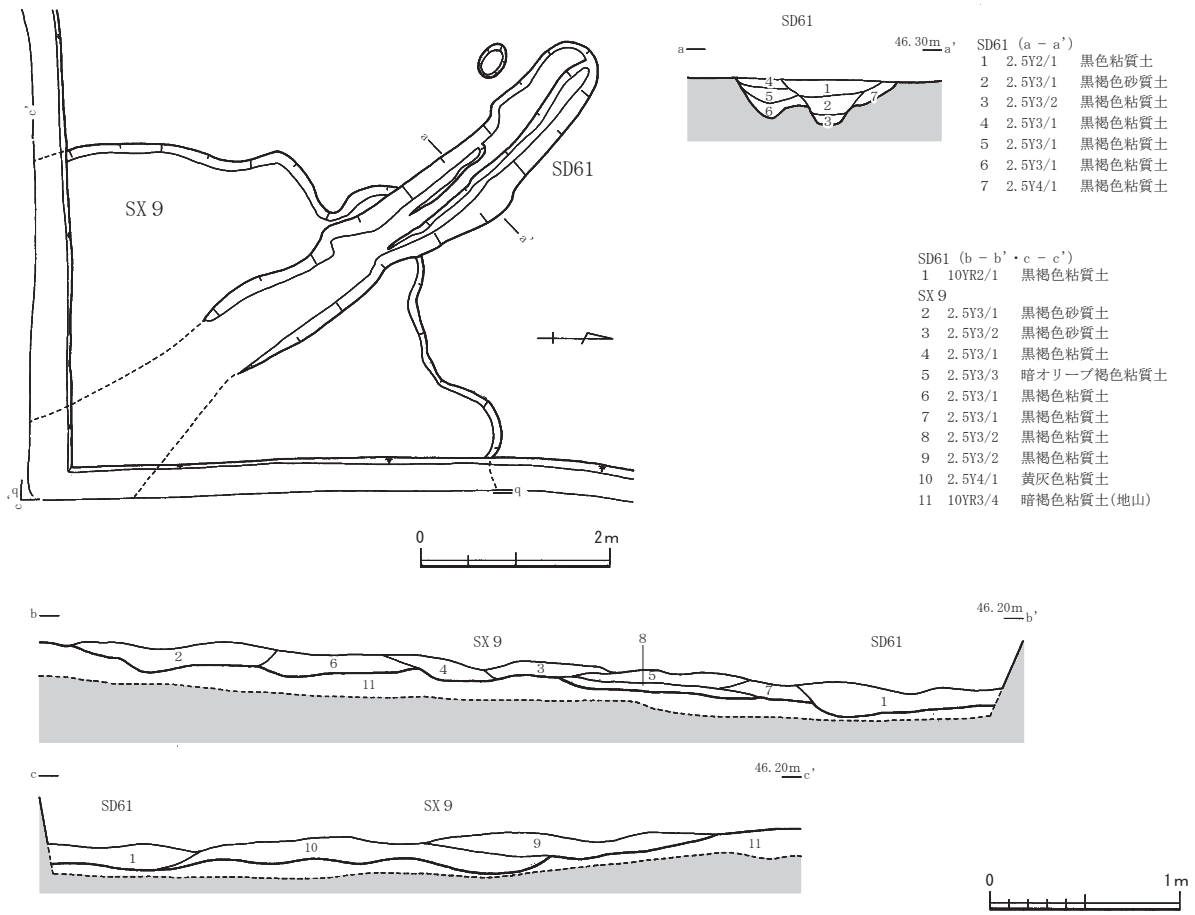
SD92

1	5Y4/1	灰色粘質土	5	5Y5/3	灰オリーブ色粘質土
2	5Y3/2	オリーブ黒色粘質土	6	7.5Y5/1	灰色粘質土
3	5Y4/1	灰色粘質土	7	2.5Y2/1	黒色粘質土(地山)
4	2.5Y5/4	黄褐色粘質土			

SD24

1	10YR4/4	褐色粘質土
2	10YR4/1	褐灰色粘質土
3	10YR3/3	暗褐色粘質土
4	2.5Y2/2	黒褐色粘質土
5	10YR6/4	にぶい黄澄色粘質土(地山)

第39図　遺構実測図34（縮尺1/40）



第40図　遺構実測図35（縮尺　平面図：1/80、土層実測図：1/40）

16は同一箇所にて複数の遺構が設けられた結果、不整形な溝のような形状になったと考えられる。

SD15は幅約0.11～1.28m、深さ約0.04～0.12mをはかる。SD16は幅約0.65～1.26m、深さ約0.03～0.07mをはかる。SD15からは、古代の須恵器の細片が僅かに出土している（第76図５）。

SD24（第39図）

２区のH18において検出した溝状遺構である。幅約0.50～1.73m、深さ約0.03～0.14mをはかる。底面に起伏を有することから自然流路と考えられる。更に、SD１に近接することから、SD１から派生した小規模な流路の一部である可能性がある。

遺構内からは、古代の須恵器の細片が僅かに出土している（第76図５）。

SD26（第39図）

３区のＬ10・Ｌ11において検出した溝である。長さ約5.31m、幅約0.21～0.45m、深さ約0.07～0.13mをはかる。西側にも同様な溝が存在しており、この両者でSB13以南の掘立柱建物群の敷地を区画している可能性がある。

遺構内からは、古墳時代の須恵器の細片、および漆器の微細片が僅かに出土している（第76図７）。

SD61（第40図）

４区のＬ２・Ｍ２において検出した溝状遺構である。４区の東端に位置し、SX９を切って設けられている。幅0.62～0.85m、深さ0.10～0.23mをはかる。北西側の土層堆積状況（第40図ａ－ａ'）から、溝幅が縮小したか、あるいは時期の異なる２条の溝が重複している可能性がある。また、底面に起伏を

有することから、自然流路の可能性もある。

遺構内からは、古代の須恵器の細片が僅かに出土している（第76図８）。

SD92（第39図）

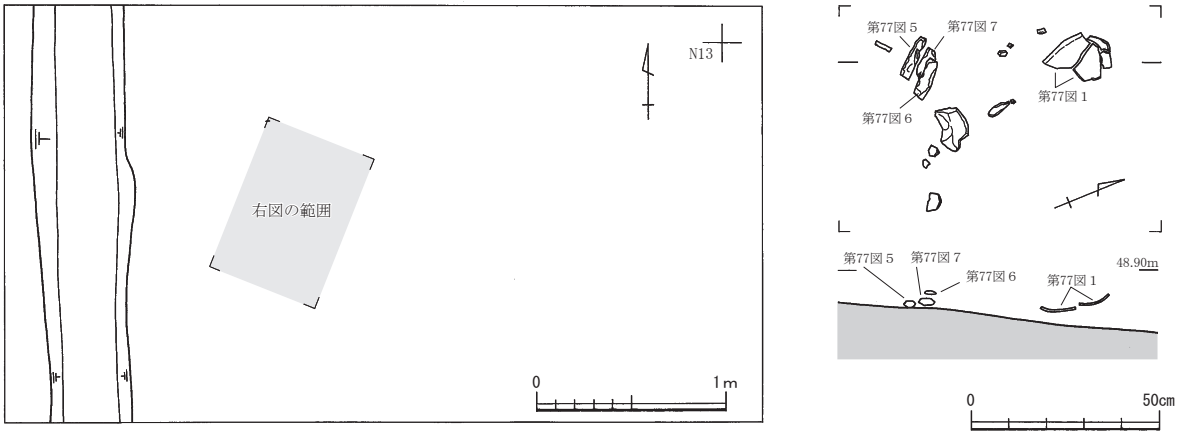
３・７区のＬ９・Ｌ10・Ｍ９・M10において検出した溝状遺構である。幅約1.10～3.53m、深さ約0.07～0.55mをはかる。蛇行しながら東西にのびる。底面に起伏を有することから、自然流路と推定される。SD１ｃがSD13を経て、このSD92に連なる可能性も考えられる。

遺構内からは、縄文土器・弥生土器、および古代の土師器の細片が僅かに出土している（第76図９・10）。

第７節　その他（図版第35、第41図）

遺物出土集中地点（第41図）

３区のN13の遺構検出面上において、縄文土器と打製石斧３点が狭い範囲内でまとまって出土した。打製石斧は長軸を揃えて３点が重なって出土しており、その北側を中心に縄文土器が出土した。縄文土器はいずれも細片であるものの、器形が復元できるものが１個体存在する（第77図）。打製石斧および縄文土器が出土した高さは、標高48.80m前後をはかる。掘り込み等が確認できないことから、遺構に伴う遺物ではないと考えられる。また、周囲においても同時期の遺構・遺物は検出されなかった。以上の点を踏まえると、これらの遺物は周辺より一括して流れ込んできたものと推定されるが、石器のみ長軸を揃えて重なって出土していることから、人為的に置かれた可能性も一概には否定できない。



第41図　遺物出土状況実測図（縮尺　左図：1/40、右図：1/20）

註

1　今回の調査区では報告書抄録に記載した調査区中心部の座標値に基づくと、座標北より東偏約０°４′35″で真北を示す。

2　各掘立柱建物の柱穴から出土した遺物の多くは、土師質の土器の微細片であった。微細片のため土器の帰属時期を特定できなかったが、胎土や調整から判断すると弥生時代以降に属する可能性がある。ただし、微細な土師質の土器と共に時期がある程特定できる遺物が出土した場合は、その遺物の時期を基に各掘立柱建物のおおよその時期を推定した。しかしながら、時期比定の根拠が脆弱であるため、掘立柱建物の形状等を含めて再度検証を加えなければならないと考えられる。

第２表　掘立柱建物床面積一覧表

遺構番号	平均長軸長（m）	平均短軸長（m）	床面積（㎡）	遺構番号	平均長軸長（m）	平均短軸長（m）	床面積（㎡）
SB 1	4.77	4.66	22.23	SB33	2.89	2.72	7.86
SB 2	10.09	4.82	48.63	SB34	3.63	3.61	13.10
SB 3	2.91	2.07	6.02	SB35	2.82	2.49	7.02
SB 4	2.75	2.66	7.32	SB36	3.44	2.91	10.01
SB 5	2.88	2.46	7.07	SB37	3.35	2.74	9.18
SB 6	3.97	3.09	12.27	SB38	4.30	2.37	10.19
SB 7	12.69	5.19	65.86	SB39	1.89	1.86	3.52
SB 8	4.03	3.12	12.57	SB40	4.51	4.05	18.27
SB 9	3.49	2.78	9.70	SB41	3.07	2.09	6.42
SB10	3.00	2.47	7.41	SB42	3.22	3.18	10.24
SB11	4.66	3.18	14.82	SB43	2.44	2.42	5.90
SB12	3.90	2.80	10.92	SB44	3.93	2.12	8.33
SB13	7.36	5.70	41.95	SB45	4.16	1.85	7.70
SB14	4.79	2.49	11.93	SB46	1.98	1.65	3.27
SB15	4.12	1.84	7.58	SB47	3.88	1.58	6.13
SB16	5.46	1.85 以上	10.10 以上	SB48	3.81	2.59	9.87
SB17	4.58	4.36	19.97	SB49	3.52	3.15	11.09
SB18	7.32	5.31	38.87	SB50	2.43	1.85	4.50
SB19	5.72	5.61	32.09	SB51	2.13	1.39	2.96
SB20	6.62	5.02	33.23	SB52	3.52	2.71	9.54
SB21	4.53	3.62	16.40	SB53	2.64	3.44	9.08
SB22	3.87	2.74	10.60	SB54	4.65	2.54	11.81
SB23	8.27	6.00	49.62	SB55	3.49	2.49	8.69
SB24	3.72	3.56	13.24	SB56	2.06	1.90	3.91
SB25	3.90	2.50	9.75	SB57	1.64	1.62	2.66
SB26	3.35	2.81	9.41	SB58	4.66	3.05	14.21
SB27	3.07	1.96	6.02	SB59	4.94	3.03	14.97
SB28	3.03	2.50	7.58	SB60	4.45	2.21	9.83
SB29	4.86	3.47	16.86	SB61	2.33	2.03	4.73
SB30	7.08	5.04	35.68	SB62	3.73	2.91	10.85
SB31	4.40	4.18	18.39	SB63	4.60	2.44	11.22
SB32	3.90	2.62	10.22	SB64	3.24 以上	2.72 以上	8.81 以上

平均長軸長・平均短軸長は、掘立柱建物を構成する各辺の柱穴列の長さの平均値である。廂等の付属施設を有する建物については、付属施設を含めた長軸長・短軸長から求めた。このため、長軸長＝桁行長、短軸長＝梁行長とはならない例も存在する。また、床面積の数値は、平面形が方形・長方形を基調とするものとして、概算した値である。

第３表　掘立柱建物床面積別分類表

床面積	対象掘立柱建物（SB は省略　太字は総柱建物）	棟数
5 ㎡未満	39、46、50、51、56、57、61	7
5 ㎡以上 10 ㎡未満	3、4、5、9、10、15、25、26、27、28、33、35、37、41、43、44、45、47、48、52、53、55、60	23
10 ㎡以上 15 ㎡未満	6、8、11、12、14、22、24、32、34、36、38、42、49、54、58、59、62、63	18
15 ㎡以上 20 ㎡未満	**17**、21、29、**31**、40	5
20 ㎡以上 25 ㎡未満	**1**	1
25 ㎡以上 30 ㎡未満		0
30 ㎡以上 35 ㎡未満	19、20	2
35 ㎡以上 40 ㎡未満	18、30	2
40 ㎡以上 45 ㎡未満	13	1
45 ㎡以上 50 ㎡未満	**2**、23	2
50 ㎡以上	7	1
不明	16、64	2